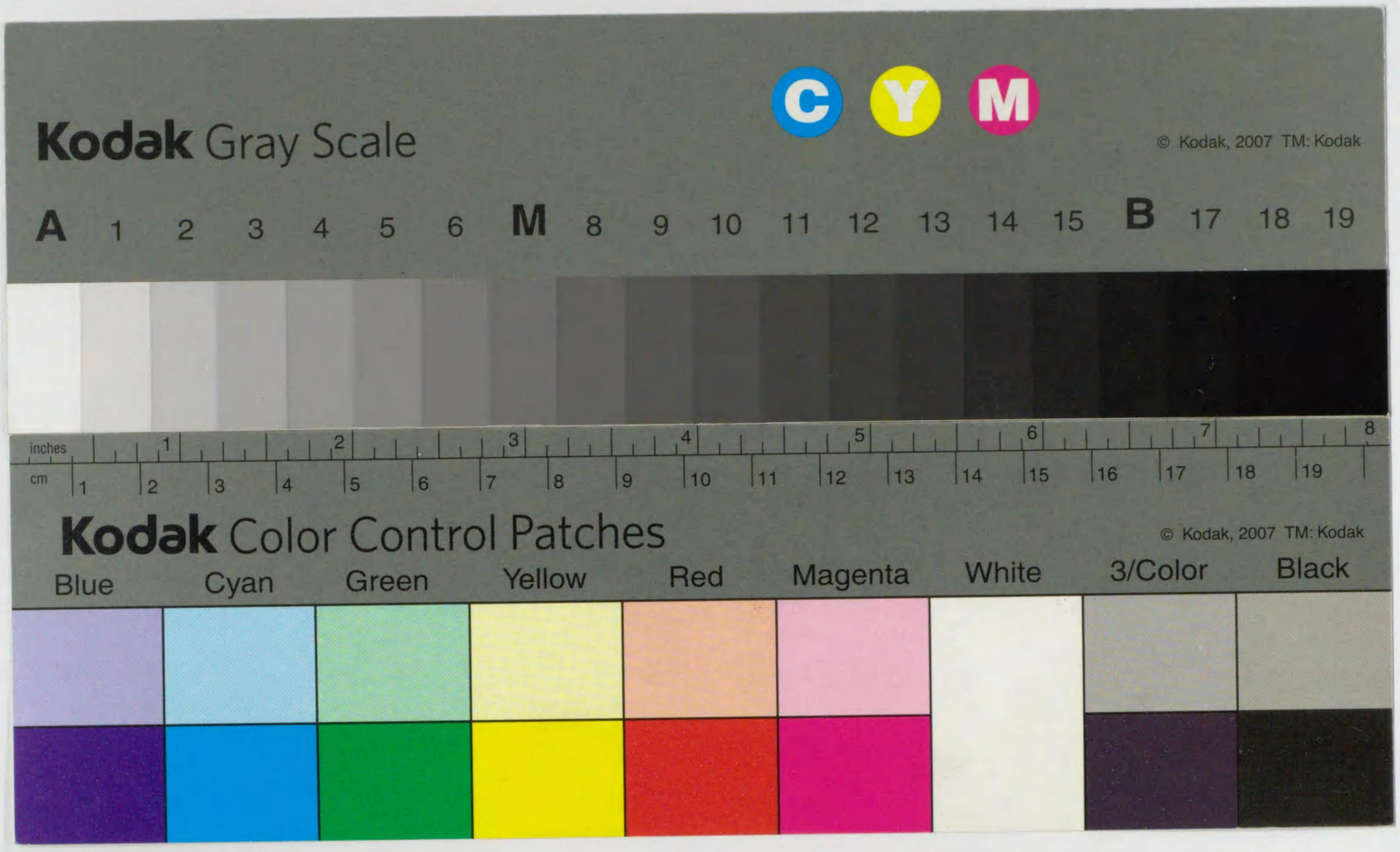

399-24
1200501466482
0 複写

LI2J-29

帝國圖書館藏

文學博士 小倉進平 著

〔言語誌叢刊〕

仙臺方言音韻考

附 濱荻

刀江書院刊

昭和七・二・廿六 東京 帝國圖書館藏

此の小篇をことし八十歳の高
齡をむかへ給ひし老母のみ前
にさゝぐ

399-24

小引

昨年言語誌叢刊第一期分の刊行せらるゝや、私は畏友東條教授より第二期以後のものとして何物かを執筆するやう御交渉を受けた。私は今日まで久しい間朝鮮の地に在住し、朝鮮に關する事項の研究に微力をさゝげ、他を顧みる餘力無きこと、又近來は內地物の研究には殆んど絕緣の狀態にあることとの二つの理由から、折角の教授の御勸めを御ことわりしたのであつた。然るに教授よりは、仙臺又は對馬方言に關する舊稿でも差支無いから是非引受けてくれとの再三の御勸めがあり、又會〻廣島に教授を訪問し歸鮮せられた同僚に傳言せられて頻りに其の受諾を慫慂せられた。私は此の際尙ほ固く御ことわりするのが、却つて學に忠實であり、又教授の御厚意に報いる眞の禮儀でもあると信じたけれども、さりとて教授より受けし多

年の知遇をむげに背くも心苦しく、月餘熟慮の結果、終に往年國學院雜誌に寄稿した「仙臺方言音韻組織」に筆を加へ「仙臺方言音韻考」として、叢刊の一部を汚すこととした。私は仙臺市に生れ、高等學校卒業まで其の地に育まれたが、その後は他鄉にあり、近來は鄉里の人々の言語に接する機會に乏しく、其の發音の如きも、漸次自分の記憶から遠ざかり行くことを心細く感ずる。此の小篇を成すに當つても、此の遠隔なる地に於て、私の滿足し得る程度に生粹の仙臺音を提供してくれる同鄉人を見出すことが困難であり、勢ひ深夜思を潛めて數年前他界せる老父の日常の談話振りを追想し、或は今故山に餘生を送る老母の口許を眼前に浮べ、思はず故鄉の茅屋に歸り、親しく父母の膝下に侍するが如き心境に襲はるゝことも再三ならずあつた。私の此の成果は主として斯の如き事情の下に生れたものであるから、或は私の觀察の誤れるものあるを保し難い。それらは後々の研究によつて修正したいと考へて居る。

本書はもと仙臺方言の音韻を論ずるを以て目的としたものであるが、柳田氏からの御勸めもあり「濱荻」及び其の補遺をも添へることにした。それは該書が本文解說にも述べた如く、今日まで未發表のものに屬し、其の語彙數の豊富なる點に於て、又各種の例證考證を註記したる點に於て仙臺方言の歷史的研究上極めて重要なる資料たり得るを感じたからである。私は卷頭に例示して解釋を施した「仙臺方言序ダシ」の文が、今日に於て其の意味を解すべからざるもの數多きに「濱荻」の力により意義用法の明かとなつたもの頗る多きに達せるを見ても、略〻該書の價値を察知することが出來よう。今後の方言研究家は此の書によつて啓發せられる所、必ず大なるものあるべきを信ずる。

昭和七年一月

京城にて

著者

凡例

一、本書方言の發音及び語例は、仙臺市を標準とし、郡部其の他の地方のものは考慮中に入れなかつた。

一、本書は方言の發音現象を論じたものであるが故に、引用した語例は必ずしも仙臺特有の方言であるといふ譯ではなく、廣く一般通用の語を示したものも少なくない。

一、發音を示す記號としては、主として萬國音聲學協會所用の音字を採用することにした。假名を以てしては發音を正確に描寫すること困難であるからである。而して各種の音韻現象中には、尙ほ今後の研究を俟たねばならぬものも存するが、細論多岐に亘るを恐れ、現代普通に行はれる學說に從つたものも少なくない。

一、アクセントの研究は音韻論の重要なる一部を構成するものではあるが、現在の私としては之を調査する便宜を全然缺いて居り、且つ其の事を新に企てるまでの時間を有せぬから、全部之を

省略することにした。

一、同一事項に屬するやうなことを、五十音各行に亘つて繰返し說明したのは、或は重複の誹りを遁れ難いかも知れぬが、單に一箇所のみに於て總括的に說き去ることは、動もすれば重要なる事項を脫落し、且つ却つて混雜を招く結果を齎さんことを恐れたに因るものである。

一、寧ろ當然過ぎて說明をまつまでもない事柄に對し、特に一項を設けて說明を加へたのは、或は煩冗に失する嫌があるかも知れぬが、そは出來得るだけ多數の材料を一般的に提示し、後日の研究家の參考に供せんとの微衷に出でたのである。

一、「濱荻」の說明文中には假名遣を誤れるものも少なからず發見されるが、それが却つて方言の特質を物語るものである場合には、特に原本のまゝ揭記した。

一、「濱荻」中には引用書目を誤り、又誤寫をなしたものが非常に多い。明白なる誤寫は正しきに從つたけれども、不明なるものは其のまゝに存するか、或は闕字とした。

目次

第一編　總說……一
第二編　各說……二三
第一章　母音……二三
A　あ（a●a:●ã）……二三
B　い（ï●i:●ï:●ĩ）……三〇
C　う（ɯ●ɯ:●ɯ:●ũ）……三八
D　え（e●e:●ẽ●ɛ:）……四四
E　お（o●o:●õ）……五三
第二章　子音……五八

目次

A　か・が・が・くゎ（k・g・ŋ・kw）行音……五八
B　さ・ざ（s・dz）行音……七二
C　しゃ・じゃ（ʃ・dʒ）行音……七八
D　た・だ（t・d）行音……八五
E　ちゃ・ぢゃ（tʃ・dʒ）行音……九一
F　つぁ・づぁ（ts・dz）行音……九七
G　な（n）行音……一〇三
H　は（h）行音……一〇六
I　ふぁ（F）行音……一〇七
J　ば・ぱ（b・p）行音……一一一
K　ま（m）行音……一一六
L　や（j）行音……一一七
M　ら（r・ṛ）行音……一二〇

N　わ（w）行音……一二五
O　音倒置（Metathesis）……一二五

濱荻……一二七

仙臺方言音韻考

第一編　總說

仙臺方言に關し、今日までに世上に現はれた書は管見の及ぶ所では次の如きものである。

一、仙臺言葉。一卷。猪苗代兼郁。享保五年。
二、方言達用抄。一卷。贅庵。文政十年。
三、仙臺方言。一卷。大里源右衞門。著作年代不明。
四、濱荻。一卷。匡子。同補遺。著作年代不明。
五、仙臺方言。一卷。堀田水月公。享保五年。
六、仙臺方言。一卷。編者不明。文政十年？
七、宮城縣方言考。猪狩幸之助。明治三十四年。

八、仙臺方言考。一卷。伊勢齋助。大正五年。

九、仙臺方言集。一卷。土井八枝。大正八年。

一〇、東北方言集。一卷。仙臺稅務監督局。大正九年

其の他伊勢氏の「仙臺方言考」によれば、明治中小倉博・萱場文二兩氏編「仙臺方言」、小倉博・大築洋之助兩氏編「仙臺方言考」(第二高等學校尙志會雜誌所載)等あり、又其の後宮城縣各郡教育會などにて編纂したる鄕土資料中に方言に關する記事が含まれて居る由であるけれども、何れも未だ一瞥するの機會を得ぬことを遺憾とする。

右諸書の中(一)より(六)までは明治四十三年中私が故大槻文彥博士より拜借して自ら之を謄寫しておいたものもあるが、其等の中の(一)より(三)までは曩に刊行せられた「仙臺叢書」卷八(大正十四年)に收錄せられ、又(八)、(九)、(一〇)は夫々單行本として板行せられたものであるから、世人は容易に此等を手にすることが出來る。然るに(四)、(五)、(六)は今日まで印行せられたこと無きが如く、(七)も今日保存せられて居る人が少ないことであらう。

(一)より(三)に至る三種の書の由來に關しては「仙臺叢書」各書卷頭の解題によつて明かに知られることと思ふから、更に贅言を加ふる必要を認めぬが、玆に今日まで比較的世に紹介せられて居らぬ(四)、(五)、(六)及び(七)の由來及び內容を略述する序を以て、該解題に對する補說をも併せ述べて置くことにする。

一、仙臺言葉。「仙臺叢書」收錄の「仙臺言葉以呂波寄」は大槻本では單に「仙臺言葉」(大槻博士は宮城縣栗原郡佐沼の人半田卯內氏の藏本を謄寫せられたものであるが、半田氏本は更に仙臺佐藤信氏の本に據つたものであるといふ)となつて居る。菊(或は兼か)花堂の跋文は內容行文略々同一であるが、間々何れかに文字の書誤りが存するやうに思はるゝものあり、且つ語彙の點からいふと、叢書本に比し語數多く、著しく增補せられて居るやうである。

二、方言達用抄。「仙臺叢書」收錄の「方言達用抄」は大槻本と略〻同一であるが、大槻本には以外に「品物異名」約百語、「追加」二十四語、「大抵江戶通用の詞等」四十一語其の他を揭げ、それらに解說を加へて居る。大槻本はもと仙臺の人櫻田櫻丸氏所藏の本を大童信太夫氏が寫し置かれたるを複寫せられたものであるといふ。

三、仙臺方言。「仙臺叢書」收錄の大里源右衞門編「仙臺方言」は大槻本と全く同一物であり(大槻本片

假名)、仙臺の儒臣櫻田周輔（名は、質、虎門）の作なりとも傳へられて居る。但し叢書本卷頭「仙臺方言序ダシ」の註解は新たに現代語を以て試みられたものであるが、大槻本には本文の左側に編纂當時の別種の註解が施されて居る。

四、濱荻　仙臺伊達伯御藏の書を大槻博士が書寫し置かれたものである。撰者は單に匡子と記してあるだけで、姓氏年代を明かにすることが出來ぬが、序文に就いて見るに、もと江戸伊達邸に事へた侍女であり、後仙臺に下つて十餘年も其の地に滯在、終に仙臺方言の骨髓をも辨へ、之を江戸言葉と對照比較したものである。各頁十行二十字詰、二百餘枚に亘る浩瀚なる語彙集であるが、各語の下に加へられた語釋考證は別人の試みたものらしい。卷末に「濱荻仙臺部補遺」あれど、これまた何人の作なるかを明かにし難い。

五、仙臺方言　本書は明治三十二年大槻博士が仙臺大內源太左衞門氏の藏本により謄寫し置かれたものである。註して「享保五年堀田攝津守樣御撰」とある。之に對し大槻博士は本書の後記に「享保とては堀田水月公と時代違へり。云々。水月公は天保四年九月九日七十五歲逝去なり。」とて疑を存せられ、尙ほ「享保五年連歌師猪苗代兼郁の作の仙臺言葉を增減したるものの如し。水月公の作としても極めて少壯なる時のものなるべし。」と補記せられて居る。本書の內容を「仙臺言葉」と比較するに語句及び解說とも略々同一であるので、兩書の間に密接なる關係の存することも容易に推知せられる。語數は兩書とも百五六十である。

六、仙臺方言　編者不明、前記「方言達用抄」と序文・凡例・內容等全然同一のものであり、「品物異名」「追加」「大抵江戸通用の詞等」をも載せてある。書中二三箇所に七福神の繪を挿入し、會〻其の一隅に「文政十年云々」など添記せられて居るのを見ると、其の編著が同年に屬し、何れが原本であるか、俄かに判斷を下すことが出來ぬ。

七、宮城縣方言考　仙臺市出身故文學士猪狩幸之助氏の編するところ、明治三十四年二三月頃の仙臺市發行の新聞（河北新報か）に連載せられ、「第一名詞の部」として五十音順により語彙を提示し、それに解說を施されたが、私の手許には其の切拔が「と」の部までしか保存せられて居らぬ。恐らくは完成せられずしてやんだものであらう。

以上解說を試みた七種の方言集並に前記伊勢・土井兩氏及び仙臺稅務監督局所撰の諸方言集等の外に東條操氏の調査[註]によれば、近年宮城縣下に「名取郡誌」・「遠田郡誌」・「栗原郡誌」・「牡鹿郡誌」・「登

米郡誌」・「坂本村誌」などあり、何れも方言研究資料を含んで居るといふことであるが、自分は未だ此等を寓目するの機會を得ぬ。又私自身が明治三十七八年頃、時の國語調査委員會編纂の「方言採集簿」に自ら記入して置いたものもあるけれども、固よりそれを公表するまでには至らなかつた。

〔註〕東條操氏「鄉土誌方言資料目錄」(二)昭和五年九月發行「方言と土俗」第一卷第二號所載。

○

仙臺方言が一種の特徴を有することに關し、古人が全く氣がつかなかつたとは容易に斷言する事が出來ぬ。事實の眞僞は明かでないにしても、仙臺藩祖伊達政宗公が、嘗て上洛の際、禁中にて公卿等が仙臺侯の國許は人の言葉をかしと聞く、國言葉にて歌よみて聞かせよとあつたから、政宗公やをら

「東から眞赤な月がずばぬけて、いづこの雲にのたしこもらむ。」

と詠まれたといふことである。〔註〕此等は口だみた仙臺の國訛りが、古くから堂上人の耳に如何に奇異な感じを與へたかを物語るものであり、式亭三馬の「浮世風呂」にも仙臺淨瑠璃の語り癖を節面白く記述して居る。又仙臺城下の言葉に關しては、「方言達用抄」の卷末跋文に

「扨言葉遣ひ江戸は江戸と定まる樣なれ共、江戸にても屋敷方町家下賤の者の言葉にて違ふ言葉もあらん。仙臺にても諸士屋敷町家近在などにてかわりし詞もある也。又此書中の言も書面通より昔と今にて違ひもあるべし。懸引心を付るを尤もよしとし、大抵は此書に記し置通也としるべし。」

など、城下の方言も士族屋敷と町家、即ち階級職業等により言葉遣ひを異にすることあり、又古今によつて相違せるものあることを述べて居る。此等の記事は極めて斷片的ではあるが、往時に於ける仙臺方言の特質に就き何物かを物語るものであり、後世の言語研究者に對し貴重な資料を提供するものといふべきである。

仙臺方言に存する物名、用言其他の單語が如何に他の地方と趣を異にして居るかは何人にも容易に感じ得る所であらう。併しながらそれは敢て仙臺方言にのみ限られた現象では無い。方言の特質は勿論、單語其のものの言ひあらはし方、又語句連結の法則上にも現はれて來るけれども――從來の方言研究は多く斯る方面にのみ偏局した傾があるが――それは決して方言の特質の全部ではない。方言の特異性の重要な點は、或る場合には單語其のものの奇形よりも寧ろ發音の特異性に起因する

場合も少くはない。前に掲げた往昔よりの各種の方言集の如き、幾多の珍らしい單語を世人に紹介する點に於て立派な功績を遺したものと言ひ得ようが、其の實際上の發音をどの程度まで忠實に描寫して居るかは甚だ疑はしい。中には異常なる發音を表記せんが爲め苦心した形跡を認め得るものも無いではないが、それとて十分な確實さを有して居ると評することが出來ぬ。方言の研究は意義及び音韻の兩方面の調査が完全に成し遂げられねば、未だ十分なる效果を收め得たものと稱することが出來ぬ。私の此の小篇の目的は今日まで餘り重要視せられなかつた音韻方面の研究にある。故に書中に仙臺特有の語彙が多數に引用せられて居らぬといふ理由に於て一部からの非難を受けるにしても、それは私に取つてはさほど重大な問題ではない。何となれば私の當面の問題は主として生きた仙臺方言の音韻現象を取扱はうとするにあるからである。併し古い方言集中に珍らしい單語があり、それが兼ねて音韻攷究の參考となるべきものであるならは、固より遠慮なく採錄したが、最初から珍らしい單語を羅列するのが本篇の目的でないことを豫め十分おことわりして置く。

音韻の各論に入るに先だち、私は一つ一つの單語から離れ、仙臺方言で綴られた、數種の文例を示し、一應其の意義を解き、發音を忠實に描寫して見ることが、該方言の概念を得る上に必要であると考へる。それで次に過去に於て行はれ、又現在に於て行はれつゝある、方言的色彩の濃厚なる若干の仙臺方言による散文及び俚謠等を掲出し其の意義と發音とを註記しようと思ふ。

〔註〕仙臺叢書卷八「仙臺方言集」解題。

一　仙臺方言序ダシ

前に解說を加へた大里源右衞門編にかゝる「仙臺方言」の序文である。文は當時の方言により綴られたものであるが故に、中には今日全然使用せられぬものも含まれて居るが、其等は數種の方言集に採錄せられたる語彙を參酌して註解を施すこととする。尙ほ方言に對する解釋文は原本にありては本文の左側に細字を以て添記せられて居るが、茲では印刷上の都合により、本文の下に括弧を附して挿入することとする。

(1) ヲラァ（コチ／ノ） ora:　ヲクニャア（御國／ハ） ogumja:

(2) クチイタテハッテモ（モノチイ／ハトテモ） kudzi: tadebatteno

(3) ナイテモ（何テ／モ） nẽ: demo

字トヲリタァカラ（文字ノトチ／リナカラ） dzi dori da: gara

(4) カハクニ（アマ／リニ） gawagu-ni

(5) スッホイチャウナコァ（チカフ／タコハ） suppoetjo:na koda:

マレカマレタト(6)ハアリ {マカリ レナト}
mare-ŋa-mareda-do-ba:rï

レウケンシテ {エテ コロ}
rjo:ken sï̥te

ア(7)イマニ {マ、}
ɛ:manï

他所辯
taʃoben

ナトヲツカフモンガ(8)アライ {ガアレベ マネルモノ}
nado o tsu̥kaɯ mon ŋa arɛ:

キクモハ(9)ア
kïgɯmo Fa:

イ(10)ツクニ {トズン}
ekkɯnï

コ(11)ツチヤウ
kottʃo:-

シクテ {シクテ ツカ}
sïku̥te

ウスバカナア {ウア ホ}
ɯsɯbagana:

コ(13)ツタリナシダトバアリ {ハタ カワ リウト}
kottarï-nasïda-do-ba:rï

ノ(14)タシニ
nõdasïnï

ヲ(15)ロシツケタアコモ
orosïtsu̥keda kodo-mo

アツタアケイガ {コヤ モミ アト リチ ロシ ガシ タ}
atta:keŋa

サテ又
sade-mada

他所ナド(16)サ
taʃo-nãdo sa

デキデ(17) {出テ}
dekï̥te

クチイタツト {云モ トノ チ}
kɯdzï: tatsu̥-to

ネ(18)ツカラ {トズ キ}
nekkara

ワカラナイテ {ヌワ テカ ラ}
wagaranɛ̃:-de

ヲ(19)カチイトテ {シオ イカ}
ogatsï:-tode

ド(20)ツトヲカくシテ {トド ツ}
dotto:-kɛ:sï̥te

ワ(21)ラアレルコモアルカラ {ルワ コラ モワ アレ}
wara:rerɯ-kodo mo arɯgara

ヘル ユ}

コンナア書物(22) {物知 ヲ此 書}
konna: ʃomodzɯ:

ミテヲイダアノモ(23)
mïde- oeda:-nomo

チクトア(24) {スハ コ}
tsï̥ku̥toa

ヤクニモ
jagɯnïmo

タツくイカア(25) {ナ益 ラニ フモ}
tadzɯbe: ga:

コイツハサア {ハコ レ}
koedzɯ-wa sa:

タイツカ(26) {カタ レ}
daedzɯ ŋa

シタカ
sï̥taga

シラナイ(27)
sï̥ranɛ:

カ {ヒシ ラ子}
ŋa

ヨヲクシンカニ(28) {ドヨ ウク メニ ン}
jo:gɯ sïnkanï

ヨセダアモンダア {タア モツ ノメ}
joʃeda: monda:

コレバアリ
koreba:rï

ノモンダアカラ {コレ モバ ノカ ユリ ヘ}
nomon-da: gara

カツキノシレタアゴツタアゲレ尺 {タカ ナリ ノ ヒシ レ}
kakkï no sï̥reda: gotta: geredomo

ナイデ(30)
nɛ:de-

モ {何 セテ ヨモ}
mo

カラタアヤンデア(31) {シホ ミテ テハ テ}
karada: jandɛ:

デナイコツタテバサ {事デ ヨキ ヌ}
denɛ: kotta deba-sa:

テンコ(32)
tengodz

ïチナイ {ダト ン}
ïnɛ:

バカナアヤツモ
bagana: jadzɯ mo

アツタアモンダデイ {ヨモ ノ}
atta: monda-de:

シタガ {ルシ ニカ}
sïtaŋa

コ(33)
ko

レイヨンデ {ヨコ ミレ テテ}
re: jonde

ヲボイダガラツテ {タテ トボ テイ}
oboeda garatte

キ(34)ツムコア
gïdzɯmɯ-goda:

{リ ハキ ム}

サンマイ(35)
dzammɛ:

シロ {セマ イ、ニ}
sï̥ro

テンくンカラ(36) {ヨモ リト}
tempen kara

シヤカラシヤイドウモナイゴ(37)(38)ツタカラノ
ʃagara-ʃaïdo: mo nɛ: gotta gara no

ゴッダ[38] gotta　ダバサナムシ[39] daba sa: namusi[40]（タワイモナイ｢｝シヤユヘノ｢ソ）

盆ツメノ夕飯後 bontsume no ʒuu: han-ɲo（盆前ニサシツマリタ書｝八ツ半時ノメシクフタ後）

大里 源右衛門 oidzado genuimun（ニム｝ン）　ワスラカキ[41] wasiʒa-ʒagi（タハフ｝レ書）

(1)「お國」は「おぐに」の如く發音する。第二音節以下にある「か」行音は多くの場合濁音に變化する。(各說第三九節參照)。

(2)「口たつ」とは物言ふことである。大里が「仙臺方言」にも「クチヲタツ、クチイタツ。モノイフ｢。愚按スルニ鄙下ノ人ヂクチヲタ、クモ云｢アリ。」とある。「口」・「立て」等の如く、第二音節以下に「た」行音が來る場合には「くぢ」・「たで」等の如く濁音に變化することが多い(第九三・一〇三節參照)。「クチイ」の「イ」は「チ」の長音を表はす。目的格を表はす「を」を省略し、其の代りに其の前にある母音を長音に發音すること敢て珍しくない(第一〇節參照)。

(3)「ナイデモ」は「何でも」の義、「濱狄」に「ないだといふ」を「なんといふ」と解して居る。

(4) 今日は用ひられぬ語のやうである。「濱狄」補遺には「かはくに、だはく共、大造にといふやうなる事」とあり、大里が「仙臺方言」には「ガハク、ダハク、莫大ト云ガ猶シ、ガハクニ金ガ入ル、ガハクニ物ヲ食フト云類ナリ。」とある。

(5)「スツホイチヤウ」は今日廢語のやうである。但し「方言達用抄」には「すつほつちやう、筋ちがひ」とあり、大里が「仙臺方言」には「ソツベクドウ、スツホイチヤウ、皆的ヲハヅレ、トリチガフタヤフナ｢ニ用ユ。」とある。

(6)「バアリ」は「許り」の義、大里が「仙臺方言」にも「バアリ、バリ、バカリノ略ナリ。コレバアリアル、ウソバアリ語ル、ヲレバリ難儀スルナド云類ナリ。」とある。

(7) 間間の義。

(8)「アライ」は「あれば」の義、are: (又は ariɛ:)の音を寫したものである。方言では「ありや」とは言はぬ。

(9)「聞くも、はや」ほどの義、「はあ」は多く Fa に發音せられ(第一二二節參照)感歎詞に屬する。大里が「仙臺方言」に「ハア、ハ、スベテ詞ノ下ニ用ユ。子ベイハア、ヲキベイハア、ヨカンベイチヤアハア、イクカハア、カヘルカハアト云類ナリ、又略シテハトバカリモ云｢アリ。」とある「ハア」、「ハ」もこれである。

(10)「イツクニ」は今日使用せられぬやうであるが、古くは盛んに行はれたらしい。「濱狄」には「いつくに、田舍

詞、いつそ」と言ひ、猪苗代が「仙臺言葉」には「いつくに、どうもと云事」とあり、大里が「仙臺方言」には「イツクニ、江戸ニテイツソト云ガ如シ。」又「イツクニ、イツクニハア、ズントト云ガ猶シ、イツクニヨイ氣デギツム（ズントトヨイ氣デリキム）イツクニコツチヤウシクテ（ズントハヅカシフテ）ト云類ナリ。」など言つて居る。

(11) 此の語も今日廢語らしい。「濱荻」補遺に「こつちやうしいは笑止の轉、はつかしき事。」とあり、大里が「仙臺方言」『こ』『こつ』の條には「コツチヨウシイ（ハツカシイ）」とある。

(12) 「薄馬鹿な」の義。

(13) 「コツタリナシ」は今日使用せられぬ語のやうである。「濱荻」補遺には「こつたりなし、こばかなといふ類」とある。

(14) 今日廢語のやうである。「濱荻」補遺には「のだし、のつへいとも。しきり境もなきやう成る事」、「方言達用抄」には「のだしに、無性に」、大里の「仙臺方言」には「田モ畑モノダシニナツタ（洪水ナド一面ニナリタヤフナ）」などとある。

(15) 「おろす」とは輕蔑する義。「濱荻」にも「おろす、下す也、いひ下す心、くさす。」などある。

(16) 「さ」は方向又は場所を示す助詞「へ」・「に」の義に用ひられる。大里の「仙臺方言」にも「サ、他邦ニテヘト云所ニ用ユ。江戸サイク、京サイク、家サカヘル、馬サノルト云類ナリ。」などある。

(17) 大里が「仙臺方言」に「デル、デキル。此二言混用ス。盃ガデタ、化物ガデル、注文ノ通ニデル、花見ニデキル、今カラ御殿ヘデキルト云類ナリ。」とある。「濱荻」『まかりできました』の條にも「出るといふ事をできるといへり。」とある。「出る」『出來る』の用法に區別無きこと今日に於ても同樣である。

(18) 今日に於ては案外によからぬこと、つまらぬことなどに言ふ。「方言達用抄」に「ねつから、根より、つまらぬ事也。」とあり、大里が「仙臺方言」には「ネツカラ、ネカラア、小兒ナドノ人ニ戯侮セラル、時ニ用ユ。江戸ニテアレサナド云ヤフナル所ニ用ルナリ。」などある。

(19) 今日も「をかしい」を「をかちい」といふ（第一〇六節參照）。

(20) 「どつとうかへす」の語、今日用ひられぬやうである。

(21) 「笑はれる」は今日も「笑あれる」と言ふ（第三節（イ）の條參照）。

(22) 「書物を」といふ場合に、「を」を省き、其の直前にある母音ɯを長くし、「しよもづう」と發音すること今日に於ても行はれる（第一七節參照）。

(23) 「見て置いたのも」の義。

(24) 「少しは」の義。寧ろ tsikuɯtɕa の如き發音となる。

(25)「たつべい」は「たつだらう」の義。「べい」は古くからの方言である。

(26)「濱荻」補遺に「だいつ誰といふ事」、大里「仙臺方言」に「ダイツ誰ト云ㄱ、鄙人ノミ用ユ。」などある。

(27)「知らない」(ʃiranai) の ʃira は si̥ra の如く發音される（第一四九節參照）。

(28)「しんかに」は今日「靜かに」の義に用ひられるやうである。「濱荻」補遺には「しんかになりて、面倒をいとはずつとめる心」とあり、大里が「仙臺方言」には「シンカニナリテ、メンドウニ堪ヘテ、ワキヒラミズニカヽルヲ云、江戸ニテシンニナリテト云。」とある。

(29)「かつき」は今日廢語のやうである。「濱荻」補遺に「かつき、限りといふ心、又際といふ心、かつきのしれたといふはかきりのしれたといふ事、ひとかつきとは一きわといふ事。」とあり、大里「仙臺方言」には「カツキハシレタ、限ノシレタト云ㄱ、又一トキワト云ㄱヲ一トカツキト云。」などある。

(30)「濱荻」補遺に「ないてもかへても、何でもといふ事」とある。

(31)「からだやむ」とは骨惜みをすること。大里「仙臺方言」に「カラダヲヤム、カラダヤミ、カバネヤミ、骨ヲシミト云ㄱ、懶惰ノ義ナリ、江戸ニテズルケルト云。」などある。

(32) 今日は廢語か。「濱荻」補遺に「てんこちもなひ、無天骨也、宇治拾遺にききの翁よりは天骨もなく、おろかなでけり。今いふ所は案の外といふやうなることにいへり。」とあり、「方言達用抄」には「てんこちないい、つかもない、あるまじき事をする。」とあり、大里が「仙臺方言」には「テンコチナイウソヲコク、トツカモナイウソヲツク。」などある。

(33)「コレイ」の「イ」は「レ」の長音を表はす。目的格を表はす「を」を省略し、其の代りに其の前にある母音を長音に發音したのである（第二五節へ參照）。

(34)「濱荻」に「ぎずむ、きすぐの轉ぜしにや。きすぐは木强、韵會不二柔和一皃、史記云尹齊木强少レ文、これとは聊心たがへり。江戸にてわるくりきむ、又はきいたふうなどいふたぐひ也。きすくする。」とあり、「方言達用抄」に「ぎつむ、りきむ關東詞」とあり、大里「仙臺方言」に「キヅム、リキムㄱ」などある。

(35) 今日廢語か。「濱荻」に「ざんまいかむなけ、三昧也、ざんまいしろ共、まゝにしろ」。猪苗代が「仙臺言葉」に「ざんまい、まゝといふ事」。堀田水月「仙臺言葉」に「ざんまいしる、まゝにするといふ事」。大里が「仙臺方言」に「サンマイ、ザンマイカンナケ、ソノマヽニステヲクヲ云、マヽヨト云ㄱ、ソノマヽニヲケト云ㄱヲサンマイニシロト云。」などある。

(36)「最初から」の義。「濱荻」に「てつへんこなし、びしやをかける共、あたまこなし。」といひ、大里が「仙臺方言」に「テツベツ、ハシメ又アタマト云ㄱ」とある「てつべん」・「てつべつ」も同語である。

(37)「濱荻」に「しやからなし、しやからもなひ共、しやからしやいどうのない、たはいなし。」とあり、「方言達

用抄」に「しやからなし、しゆ意もない。」とある。今日も「しやがらなし」は同義に用ひる。

(38)「ゴツタ」・「ゴツダ」は「事だ」の義。

(39)今日では多く「でばさ」（「てばさ」の訛）といふ。

(40)今日では廢語のやうである。大里が「仙臺方言」に「ナムシ、ナモシ、ネナイシヤ、子ナイシ、ナア、他邦ニテノト云所ニ用ユ。人ノ物語ヲ聞テ、サテナムシ、サテナモシ、サテナイシヤ、サテナイシ、サテナア、ト云類、又人ニ物語スルニ、コフデナムシ、アヽデナモシナド云類ナリ。」などある。

(41)「ワスラ」は「わるさ」の音倒置（第一五五節參照）であらう。「濱荻」に「わすら、益もなき手すさびをいふ。わるさ。」『方言達用抄』に「わすら、代言未考。但し手を遊ばせる事、俗子供にわすらにするなよ、わすらをするな、などいふ詞あり。皆いたつらむたをするなといふ意也。」大里が「仙臺方言」に「ワスラ、ムダアソビニスル」ヲ云、童子ノ手ワスラナド云。」などある。

二　方　言　歌

(1)いぐひすや　初音ぶんだせ　聞くべいに　(3)あぜい　啼かない　(4)無沙汰だんべい。」
eʒuesu-ja　hadzune bundaʃe　kiʒgu-bε: ni:　adʒe　nagane:　busada dambe:

(5)奥州　の　仙臺名物　(6)おらやんだ
o:si:　no　ʃendε:-me:budzu　ora janda

ホウカイ　ちよつと　(9)がいまつ　(10)(さ?)まだてよがんべちや　(7)そうずしや　(8)そでがす　そでかいんか
tʃotto　gae-mädzu　kiʒtatte jogambettʃa　soʃʃa　sode-gasu　sode-gaen-ka

(11)いけすかねア　(12)あね—やろ　(13)ばけ—やろ。」
egesuʒkane:　ane:ro　bagε:ro

右の兩歌とも仙臺市の方言歌として「諸國童謠大全」（明治四十二年）・「俚謠拾遺」（大正四年）に載せられてゐるものであるが（前者は古く「倭訓栞」大綱中にも奥州の方言をよめる歌として出てゐる）、今日も人口に膾炙せられてゐる。

(1)古く鶯を「いぐひす」と言つにか否か明かでない。諸方言集にも見當らない。

(2)「ぶん」は「打ち」を意味する接頭語。

(3)「なぜ」「何故に」の義。今日は餘り用ひられぬやうである。

(4)「無沙汰」は普通の無沙汰の外、粗忽にする義にも用ひられる。大里が「仙臺方言」に「ブサタニスル、ソマツニスル」、神佛ヲブサタニスル、米ヲブサタニスル、火ヲブサタニスルナト云類ナリ。」などある。

(5) 奥州の州(ʃɯ:)の發音困難であり、ɕi:の如くなる（第八・七九節參照）。
(6) 「おら」は「己」・「自分」・「私」の義。「やんだ」は「厭だ」の義（第一一八節(b)の條參照）。
(7) 「そうすしや」は「さうっしや」(soʃʃa)を寫したものなるべく、「さうですよ」の義である。
(8) 「そでがす」は「左樣で御座います」、「そでがいん」は「左樣で御座いません」の義。
(9) 「がい」は「來られよ」(御座れ)の義（第四一節參照）。「まつ」は「まづ」なるべく、「書けまづ」（兎に角書くがよい）・「行けまづ」（兎に角行くがよい）等の如く、句末に添へる助詞である。
(10) 「ま」は「き」の誤か。「來たつて善からうに」の義。
(11) 「好かぬ」の義。「いけ」は接頭語。
(12) 「あの野郎」の義。
(13) 「馬鹿野郎」の義。

三　童謡・子守唄・手毬歌

私の私記中より二三を例示する。

(1) 雪こんこんこん　お寺の松の樹さ(2)　雪一ぱい　たまつた　小僧小僧ほろけ
ʒugï kon kon kon　odera no madzu-no-gï sa　ʒugï epp:　tamatta　kodzo: kodzo: horoge

雑絹かけて雑取つて　和尚さんに身んどころ　小僧骨かりこり。（童謡）
kïdzï-wana kagede kïdzï totte　oʃo:san nï mïndogoro　kodzo: hone karï-korï

ねんねこや　ねんねこや　寝たら鼠にひかれべし(3)　起きたらお鷹に　さら
nennekoja　nennekoja　nedara nedzumï nï hïkarebesï　okï-tara odaga nï　sara

はれべい。（守唄子）
warebe:

仙臺の（又、大町の）大町の　煙草切り屋のお姉さん(4)　大綿帽子で　顔
ʃende: no o: madzï no o:madzï no　tabago-kïrïja no o-aneʒan　o:wada-bo:sï de　kao

隱し　裏の細道　通たれば　六つや七つになるわらし(5)　お父
kagusï　ura no hoso-mïdzï　to:ttareba　mudzu-ja nanadzu-nï narru warasï　odo-

つあん　おがさん(4)　どちやござる(6)　私は　觀音寺詣り　後の
tsan　ogaʒan　dotʃa godzarur　wasï wa　kannon tera-mɛ:rï　ado no

千松　泣かせんな　泣かせまいとは思へども　日本照らさる　御日さま
ʃemmadzu nagaʃenna　nagaʃe-mɛ: dowa omoe-domo　ni̇ppon terasaru　(7) osi̇-sama

は　西と曇れば　雨となる　東とくもれば　雪となる
wa　ni̇si̇tokumoreba　ame to naru　hi̇gasi̇ to kumoreba　ʒugi̇ to naru

雪となる。（手毬歌）
ʒugi̇ to naru

(1) 雪(juki)の「ゆ」は「ず」類似の發音をなす（第一四六節參照）。
(2) 場所をあらはす助詞「に」の義に用ひられる。「仙臺方言序ダシ」註解(16)參照。
(3) 「べい」の中止形に當る。
(4) 此の場合の「さ」は一種の「ざ」の如く發音される（第六一節參照）。
(5) 「わらし」は子供の義、童衆の轉であらう（第三節(イ)の條參照）。
(6) 「どちらへ行かれるか」の義。
(7) 「御日さま」を此の場合特に「御しさま」といふやうである。

第二編　各說

第一章　母音

A　あ（a・a:・ã）

1 a　普通の母音の「ア」である。これがaであるかaであるかは尙ほ今後の研究に俟つ。茲ではしばらくaを以て書き表はす。

2 他の母音がaに轉じたため、方言的特質を帶ぶるに至つたもの。

（イ）i→a　馬刺虻　umasaʃi-abu——umasasa-ãbu
内伏（俯伏）　utsubuʃi——udzu-pusa

隅　sumi——suma(ko)
吃驚　bikkuri——bikkura

〔註〕「濱荻」にも「びつくら」とある。

そつくり(不殘) sokkuri——sokkura

交る(まじ) maʒiru——madzaru

芝居(しばる) ʃibai——sibaja

唇(くちびる) kutʃibiru——kudzibera

(ロ) ɯ→a

(ハ) e→a 叫ぶ(さけ) sakebu——sagabu

(ニ) o→a もつと(更に) motto——matto

3 a: 次の如き場合にaの長音が生ずることがある。

(イ) a-wa→a: 瓦(かはら)、磧(かはら) kawara——ka:ra

俵 tawara——ta:ra

〔註〕「濱荻」に「おついしやう、けいはくして、おはいたらをしよつた」(追從輕薄して灰俵を背負つたの義といふ)とある「たら」は俵の義である。又大里が「仙臺方言」には「タアラバシ」を出し、「俵端ト云意ナラン」と註して居る。

筆規 bummawaʃi——bumma:si

笑はれる warawarerru——wara:rerru

〔註〕本書掲出「仙臺方言序ダシ」にも「ワラアレルコト」とある。註解(21)を參照。

かく本來a:の長音であるべきものが、更に轉じて短音aの形に於てのみ存する場合がある。

裾廻し(すそまは) susomawaʃi——susomasi

合せる awaserru——ajerru

皮坊(かはぼう)(穢多) kawabo:——kabo

笑はれる warawarerru——wararerru

花合せ(花かるた) hana-awase——hana-aʃe

子供(童衆) warawaʃu——warasi

(ロ) owa→a: 今度は kondo-wa——konda:

等は nado-wa——nada:

事は koto-wa——koda:

(ハ) uwa→a:　こいつは(此は)　koitsu-wa——koedza:

(ニ) 主格を表はす「が」・「は」、目的格を表はす「を」等の助詞の前に、aを以て終る名詞がる場合には其等の助詞は全く省略せられて、aが長音となつて現はれることがある。

花が咲いた　hana-ga-saita——hana:-ss:da

下駄をはいて　geta-o-haite——ge:la:-hɛ:de

4 ã　aが發音せられた後、鼻音の-nが接續して構成せられるanの音でなく、aが發音せられると同時に氣息が鼻腔に向つて流出して出來上つた所謂鼻的母音である。此の音はフランス語に頻出するので著名であるが、日本語特に東京語には極めて少數の例外の場合にしか現はれぬと言はれて居るやうである。(註) 併しながら仙臺方言にありては、此の現象は極めて普通であつて、寧ろ其の主たる特質と言ふも過言ではない。世人はよく東北地方の土音は鼻にかゝるといふ。併し單に常識的に鼻にかゝるといふだけでは吾々には滿足が出來ぬ。も少し之を學問的に說明する必要があると思ふのである。私は此の鼻にかゝるといふ現象は、本地方の人が普通の母音の代りに鼻的母音を使用することが多いといふことに基因するものと考へる。例へば

味　aʒi——ãdzï

痣　aza——ãdza

虻　abu——ãbu

畦　aze——ãdʒe

風　kaze——kãdʒe

數へる　kazoeru——kãdʒe:ru

角　kado——kãdo

匙　saʒi——sãdzï

授く　sazukeru——sãtsu̥keru

謎　nazo——nãdzo

宿　jado——jãdo

に於けるãはすべて鼻的母音に發音される。

(註) (1) E. R. Edwards : "Étude phonétique de la langue japonaise" (1903) に「三」(さん) の最後にある「ん」音はã

の如く聞かれるといふことを述べてある。(第一三頁)。

(2)佐久間鼎氏著「日本音聲學」(第八二頁)。

5 以上の如く本方言中には多くの鼻的母音が挿入せられるが、さりとて母音がすべての場合に於て鼻音化する譯ではない。前記諸例に於て明かに窺はれる如くaのãに鼻音化せられるのは其の直後に「が」・「ざ」・「だ」・「ば」諸行の濁音が來た場合に限り發生し、方言的特質により「さ」・「た」・「は」行音が濁音に轉じて發音せられる場合には此の鼻音化の現象が起らぬやうである。それは次の如き類語(アクセントの所在等は別問題とし)を比較對照することにより、明かに其の差點を知ることが出來よう。

火事 kãdzï——勝 kadzï

佐渡 sãdo——砂糖 sado:

灘 nãda——鉈 nada

恥 hãdzï——鉢 hadzï

肌 hãda——旗 hada

窓 mãdo——的 mado

未だ mã:da——股 mada

迄 mãde——まで い(丁寧) made:

即ち上段の如く、本來濁音である「ざ」・「だ」諸行の音の前にありてはaは常に鼻音化し、下段の如く方言的發音により「さ」・「た」が濁音に轉じた場合には、其の前にあるaは鼻音化せられぬといふ可なり有力なる規則が成立し得るのである。

6 ãの後に尙ほ一二の音節が接續する場合、ãに直後せる音節中の有聲子音は無聲音となるのみならず、母音をも無聲音化することが屢〻ある。例へば

坐布團 zabuton——dzãpu̥ton

あぶかしい(もどかしい) abukaʃi:——ãpu̥kasï:

被せる kabuserru——kãpu̥ʃerru

度々 tabi-tabi——tãpï̥-tabï

案じ事(心配事) anʒi-ʒoto——ãtsï̥-kodo

甜瓜（かじかう）　kaʒika-uri——kãtsi̯ka-uri̯

かじける（枯凋）　kaʒikeru——kãtsi̯keru

の如きはそれである。

B　い（ïi・ii・iï・ii）

7　國語の標準的の「イ」の發音は舌の前部又は中部が口蓋に向つて著しく高まり、舌端は下に向ひ唇は左右に引かれる。然るに東北地方に存する「イ」は舌面が標準的の「イ」よりも低下し、舌端及び前舌が著しく高まつて上齒の裏面及び齒齦に亘つて接近し、s又はzの狹窄をゆるめたやうな位置で發音せられる。つまりziに於けるzの摩擦を全然取り去つた如き音である。私はziと此の方言的「イ」との間にもう一つの異なつた方言的音を發見することが出來る。即ちziは立派な摩擦音であるが、その摩擦の程度を少しく緩め、しかも純然たる方言的母音iに至らざる輕い程度に於て摩擦せしめると此の中間音が生ずるのである。而して此の音からiを取り去つた子音のみに就いて觀察すると、聽覺的にはj音に類してひゞくけれども、勿論jの如く後部で發せられる音ではない。此の前部に於て發音せらたるj類似の子音（假りにżを以て表はす）はi・e・oと結合しては現はれぬけれども、a・uと結合して「伯母（をば）さん」・「雪（ゆき）」等の「さ」・「ゆ」等となつて現はれる（第六一節及び第一四六節參照）。而してżiが更に摩擦の程度を減ずると茲に方言的の「イ」が現はれて來ると言つてもよからうと思ふ。

此の方言的「イ」は單獨の母音の場合に於て現はれるのみならず（仙臺方言では特に顯著でなく、却つてe音に轉ずること第二三節參照）各種の子音との結合、即ち「キ」・「シ」・「チ」・「ニ」等に於ても現はれるが、私自身だけの感じでは、仙臺地方では山形・秋田・青森・岩手諸縣の如くには顯著でないやうに思はれる。併しながら現在私が仙臺の發音を比較的忠實に保存して居ると思はれる或る知人の發音に徵するに、「イ」列全體に亘り可なり著しく此の方言的特質が現はれて居る事實を發見し得るから、仙臺方言に於ける此の音の勢力も相當著しいものがあると言ふことが出來よう。

此の母音の本質に關しては近來各種の說があらはれて居るが、要するに普通のiではなくして、iとuとの中間に存する一種の混合母音（註1）であり、これが東北方言に存するのみならず、琉球南島（註2）方言中にも存することが證せられて來た。而して此の特種の母音を表はす音字が未だ確立せられ

て居らぬが、其の音の聽覺からいつてもi音に類するものであり、且つ一部の人々[註(3)]により既にïが使用せられて居るから、本書にありてもしばらく「イ」列音全部に對してïを使用することとする。尙ほまた「シ」・「ス」、「チ」・「ツ」を實際の發音に從つて區別無く書くことは種々の點に於て不便を感ずること多いといふことも其の理由の一部をなすものである。つまり本書に於ては「イ」列の諸音を次の如く書き表はすのである。

日本　nihon —— nïhon

血　tʃi —— tsï

島　ʃima —— sïma

木　ki —— kï

〔註〕(1)金田一京助氏「國語母音圖」の說明中に「中間音のï云々」とある。〔音聲學協會會報第四號、第一〇頁、昭和二年五月〕。

ブレトネル氏「變的『イ・ウ』に就いて」〔音聲學協會會報第五號、第六頁、昭和二年八月〕。

佐久間鼎氏「中舌母音」〔日本音聲學、第九五頁〕。

〔註〕(2)伊波普猷氏、宮良當壯氏の諸研究。

〔註〕(3)Daniel Jones 氏は u よりも前方で發音せられる close mixed lax rounded vowel に對し ü を用ひ、ü に相對する unrounded vowel を ï で表はして居るが（The pronunciation of English P. 43）、此の場合の ï などは東北地方の「イ」とは性質を異にして居るやうである。

8　キュ（kjuɯ）・シュ（ʃuɯ）…ギュ（gjuɯ）・ジュ（ʒuɯ）…等の發音が不可能であり、すべて kï, sï…gï, zï…等の音に轉ずる。尙ほ「キ」・「シ」等各條を參照せよ。

急に　kjuɯ:-ni —— kï:-nï

襦袢　ʒuɯ-ban —— dzï-ban

忠義　tʃuɯ:-ɲi —— tsï:-ɲï

前條及び本條に於ける ï の發音は、東北辯の明快を缺く所謂「ずうずう」を感ぜしむる一因となる。

9　他の母音が ï に轉じたため、方言的特質を帶ぶるに至つたもの。

（イ）ɯ → ï　胡桃　kurɯmi —— kurïmï

懷　Fɯtokoro —— Fïtogoro

瘡ぶた　kasa-buta——kasa-pïta

鳴子　naruko——narïŋo

刻限　kokuŋen——kokïŋen

主(汝)　nuʃi——nïsï, nïsa

〔註〕大里が「仙臺方言」にも「ヌシ」「ニシ」を出し、「テマヘ、ワレナド云ガ如シ、皆卑賤ノ人ニ對シテ稱ヌ」と註記してある。

(ロ) e→ï

大角豆　sasaŋe——sasaŋï

燒飯(握飯)　jakimeʃi——jagïmïsï

木通　akebi——agïbï

戰　akaŋire——agaŋïrï

(ハ) o→ï

案定　anno-ʒo:——anno-dzï:

10 ï: 主格を表はす「が」・「は」、目的格を表はす「を」等の助詞の前に、iを以て終る名詞が來る場合には、其等の助詞は全く省略せられて、iが長音となつてあらはれることがある。

鳥は飼はない　tori-wa-kawanai——torï:-kawane:

御菓子が食べたい　okaʃi-ga-tabetai——ogasï:-tabede:

鳥を捕る　tori-o-toru——torï:-toru

口を立つ(物を言ふ)　kutʃi-o-tatsu——kudzï:-tadzu

〔註〕本書掲出「仙臺方言序ダシ」註解(2)を參照。

御菓子を買つた　okaʃi-o-katta——ogasï:-katta

11 ï 聲帶の振動を伴はぬ所謂無聲のiを意味する。東京語にありても「汽車」(kï-ʃa)・「人」(gï-to)・「鹿」(ʃï-ka)等に於けるiが、無聲の母音であることは周知のことに屬するが、〔註〕當方言にありても、此の現象が著しく、「汽車」・「人」・「鹿」等は kï-a, gï-to, sï-ka の如くなる。而して仙臺方言にありては普通のiの次に「か」行「た」行等の音が來る場合には、それが濁音に轉ずるのが通則であるが(「聞く」〔kikuu〕を kïgu、「狐」〔kitsune〕を kïzune といふ如く)、一度び無聲のïがあらはれると、其の次にある「か」行「た」行の音はïの無聲に影響せられて濁音に轉ずることを思ひ止まる(「人」をヒド、「舌」をシダと言はざる類)。又「嫌ふ」kirau を kïgau、「柱」hajira を hagï

ɹ̩aといふ如く、ɹ̩iが無聲である關係上、次に隣接してあらはれる有聲音のrまでをも無聲化すること決して珍しくはない（r音の各條參照）。

〔註〕Edwards氏は此の無聲の母音を以てささやきの場合の母音なりとし、〔i̥〕・〔u̥〕等の如く母音字の下に〔̥〕を加へて書きあらはして居る。

12 ɹ̩i　鼻音化せられたɹ̩iを意味する。例へば

肘　hiʒi——hɹ̩̃dzï

雉　kiʒi——kɹ̩̃dzï

疵　kizɯ——kɹ̩̃dzɯ

虹　niʒi——nɹ̩̃dzï

膝　hiza——hɹ̩̃dza

水　mizɯ——mɹ̩̃dzɯ

に於けるɹ̩iはすべて鼻的母音である。

13 ɹ̩iが鼻音化せられる場合と、せられざる場合とを類例によつて示す。

出づ　ɹ̩̃dzɯ——何時　ïdzɯ, edzɯ

疵（きず）　kɹ̩̃dzɯ——狐　kïdzɯne

靜（しづか）　ʃɹ̩̃tsɯka——室　sïdzɯ

二度　nɹ̩̃do——二斗　nïdo

即ち上段の如く、本來濁音である「ざ」・「だ」諸行の音の前にありてはɹ̩iは常に鼻音化し、下段の如く方言的特質により「さ」・「た」行の音が濁音に發音される場合には、其の前にあるɹ̩iは鼻音化されぬことaの場合と同樣である。

14 ɹ̩iの後に尙ほ一二の音節が接續する場合、ɹ̩iに直後せる音節中の有聲子音は無聲となるのみならず、母音をも無聲化することが屢〻ある。例へば

急須　kibiʃo——kɹ̩̃pɹ̩̥tʃo

縮こまる　tʃiʒikomarɯ　—tsɹ̩̃tsɹ̩̥komarɯ

水鼻　mizɯ-bana—　mɹ̩̃tsɯ-pana

の如きこれである。但し

三葉(植物)　mitsuba——mïtsupa

に於ける「つ」(tsɯ)の如く頭音が無聲音である場合には其の母音が無聲音化する。

C　う(u・u:・u̥・ũ)

15 國語に於ける標準的の「ウ」はuにあらずして、ɯであると言はれて居る。即ちuに比して舌根部の隆起が少しく前方に於て起り、又uに於けるが如き兩唇の著しい圓みを帶ばぬ音であるといふ點に於て諸家の意見の一致を見るやうである。然るに國語には此のɯ以外にɯよりも一層前方に於て發音される一種の「ウ」があると言はれて居る。之を表はすに ü なる記號を以てする。ɯ(mixed)がuの圓唇を缺けるものであるとするならば、üはü(mixed)の圓唇を缺けるものと言ふことが出來よう。此の音は東京語には、普通にあらはれぬが、ス・ツ・ズ(ヅ)即ちs・zに接續する場合にだけ「ウ」の位置に代つて發音されると言はれ、[註(1)]又此の音は支那語「私」・「四」・「自」・「子」等の北京音に現はれる外、琉球語の先島方言中にも現はれ、[註(2)]又東北地方に存する「ウ」は殆んどすべて此のüɯ種の音であるとさへ言はれて居る。仙臺方言に存する「ウ」列音の母音がɯであるかüであるかは尙ほ研究を要するが、どうもüɯのやうに思はれる。併し本書では印刷上の都合を考慮してしばらくɯと書することにする。尙ほ本方言に於て「シ」と「ス」又「チ」と「ツ」との混同が行はれるのは、前記「イ」(ï)の調節位置と「ウ」(üɯ)の調節位置との相近似して居る結果によるものであることはïの條(第七節)に述べた通りである。[註(3)]

總じて「イ」「ウ」列音の母音は、唇及び舌の十分なる活動緊張を缺き、動もすれば中性的母音に聞かれ易い點に仙臺方言の特質が存すると言へよう。

歌　uta——üda

鶴　tsuru——tsürü

(註)(1)佐久間鼎氏著「日本音聲學」第九三頁。

(註)(2)伊波普猷氏の諸研究。

(註)(3)朝鮮語に於て京城地方では어に二種の音を含んで居る。一はɔmɔni(母)等に於けるɔであり、二はü:dɔ(得て)等に於けるüである。東北方言の「ウ」と朝鮮語に於けるüとは其の性質が極めて近似して居るやうである。

16 他の母音がɯに轉じたため、方言的特質を帶ぶるに至つたもの。

(イ) i→ɯ　人見知　hito-miʃiri——hïtomuzïrï

(ロ) e→ɯ　嬉しい　ureʃi:——ɯrɯsï:

(ハ) o→ɯ　眼　manako——managu

〔註〕大里が「仙臺方言」にも「マナグ、眼ノ轉ナリ」とある。

損ねる　sokonerɯ——soguneru

顎　aγo——aγɯ

彼所　asoko——asugu

剃刀　kamisori——kamïsurï

屆く　todokɯ——todzugu

猪　inoʃiʃi——enɯsïsï

軒　noki——nugï

載せる　noserɯ——nuʃerɯ

檜　hinoki——hinugï

漏る　morɯ——mɯrɯ

暦　kojomi——kojɯmï

善くない　jokɯnai——zugune:

風呂敷　hɯroʃiki——hɯrɯsïgï

17　ɯ:　主格を表はす「が」・「は」、目的格を表はす「を」等の助詞の前に、ɯを以て終る名詞が來る場合には、其等の助詞は全く省略せられて、ɯが長音となつてあらはれることがある。

猿が死んだ　sarɯ-γa-ʃinda——sarɯ:-sïnda

御汁(しる)を盛る　oʃirɯ-o-morɯ——osïrɯ:-morɯ

書物を讀んで　ʃomotsɯ-o-jonde——ʃomodzɯ:-jonde

〔註〕(1)本書掲出「仙臺方言序ダシ」にある「書物ウ」も「書物を」の義である。註解(22)を參照。

(2)「濱荻」「ゆうくれる」(湯をくれ)に註して「ゆの音延る故かく聞ゆる也」とある。「ゆう」は「湯を」の義であると思はれる。

18　ɯ。　聲帶の振動を伴はぬ所謂無聲のɯを意味する。東京語にありても「草」(kɯ̥sa)・「好」(sɯ̥ki)等

の場合にありては無聲のɯ̥に發音されるが、仙臺方言にありても、此の現象が著しく

紺ける　kukeru——kukeru

使　tsukai——tsuke:

蔦　tsuta——tsuta

房　Fusa——Fusa

の如き發音をなすのみならず、ɯ̥に直後せるk・t等は濁音化することが無い。又ɯ̥の次にr音が來る場合には、rは前にある無聲母音の影響により無聲音化することが珍らしくない。

倉　kura——kura

風呂場　Furoba——Furoba

面　tsura——tsura

19 ɯ̃　鼻音化せられたɯを意味する。例へば

腕　ude——ude

獨活　udo——udo

宇治　ɯʒi——ɯ̃dzï

鈴・錫　suzu——sɯ̃dzɯ

筋　suʒi——sɯ̃dzï

札　Fuda——Fɯ̃da

筆　Fude——Fɯ̃de

柚子　juzu——jɯ̃dzɯ

に於けるɯ̃の如きこれである。

20 ɯが鼻音化せられる場合と、せられざる場合とを類例を以て示す。

蛆　ɯ̃dzï——內　udzï

屑　kɯ̃dzɯ——靴　kudzɯ

籤　kɯ̃dzï——口　kudzï

辻　tsɯ̃dzï——土　tsudzï

藤　Fɯ̃dzï——緣　Fudzï

即ち上段の如く、本來濁音である「ざ」・「だ」諸行の音の前にありては常に鼻音化し、下段の如く方言的特質により「さ」・「た」行の音が濁音に發音せられる場合には、其の前にあるɯは鼻音化せられぬことa・iの場合と同樣である。

21 ɯ̃の後に尙ほ一二の音節が接續する場合、ɯ̃に直後せる音節中の有聲子音及び母音は無聲音化するのが常である。

首　kubi——kɯ̃pi̥-ta

つぶこ(をはじき)　tsubuko——tsɯ̃pu̥ko

紙屑籠　kamikuzu-kaʔo——kami kɯ̃tsu̥-kaʔo

D　え(e・ë・ë・ē・ë)

22 e　母音の「エ」及び「ケ」・「セ」・「テ」等「エ」列諸音の含んで居る「エ」は口角の小さい閉ぢたeである。

餌　esa——esa

獸　kemono——kemono

寢る　nerɯ——nerɯ

目　me——me

23 「き」(ki)・「し」(ʃi)・「ち」(tʃi)・「に」(ni)等の如く、子音に先立たれた場合のiは、仙臺方言にありては、kï・sï・tsï・nï等の如くïの音に轉ずるが(第七節參照)、單獨なる母音の「い」(i)及び語中にありて「い」の發音をなす「ひ」・「ゐ」等はeの音に發音される。

魚屋　isabaja——esabaja

今直に　imaʒi[ki]ni——emaʒïnï

飯田　iːda——eːda

犬　inɯ——enɯ

意味　imi——emï

苺　itʃiŋo——edzïŋo

いが(栗の)　iŋa——ẽŋa

〔註〕「濱荻」にも、「くりのゐが」又「ゐが」を各條に出してある。

桟　kuui——kuue

追々　oi-oi——oe-oe

蠶　kaiko——kaego〉kɛ:go

鯉　koi——koe

胃　i——e

鳥居　torii——torïe

井戸　ido——ẽdo

従つて入と襟、院と炎、鯉と聲となどの間に發音上何等の區別が無く、すべてeとなる。

24 他の母音がeに轉じたため、方言的特質を帶ぶるに至つたもの。

(イi→e　蟋蟀　ko:roʒi——ko:roʒe

生呑　ikinomi——egenomï

道理で！（成程）　do:ride——do:rede

面皰　nikibi——negibï

人參　ningin——nenzïn

逃げる　niʒeru——neʒeru

唇　kutʃibiru——kuzïbera

夷　ebisu——ebesu

蚯蚓　mimizu——memẽdzu

第七節及び第二三節に述べたki・ʃi・tʃi・ni等が、kï・sï・tsï・nï等に轉ずることは發音上の通則であるが、本項にあるものはiが全然異なつたe音に轉じた例である。

(ロɯ→e　動く　uʒokuu——eʒogu

(ハo→e　泥　doro——dero

〔註〕「濱荻」にも「でろ」とある。

25 e:　eの長音を意味する。多くは二母音の融合又は助詞の省略によつて生ずる。

(イei→e:　西洋　sei-jo:——ʃe:-jo:

明治　mei-ʒi——me:-dzï

（ロ）ie→e:　家　ie——e:（又稀に je:）

消える　kierru——ke:rru

〔註〕大里が「仙臺方言」にも「ケェル」・「ケイル」を出し、「キェルト云事、蠟燭ガケェル、墨ガケイルト云類ナリ」と註してある。

煮える　nierru——ne:rru

〔註〕「濱荻」に「ねいる」とあるは此の語に當る。

又「教へる」〔ojierru〕を ojerru、「教へ口」（私語）〔ojie-kuɕi〕を oje-kudzï などいふ如く、當然蹈み來るべき je: の長音を省略して je の短音にのみ呼ぶものもある。

〔註〕「濱荻」に「おせこと」とあるも「教言」の義である。

（ハ）oe→e:　數へる　kazoerru——kaʒe:rru

聞える　kikoerru——kike:rru

右例の ʒe: 及び ke: は轉じて短音の ʒe 及び ke にも發音される。

（ニ）oi→e:　白粉　ojiroi——osï̥roe〉osï̥re:

土樋（町名）tsutɕiɕioi——tsutte:

一昨日　ototoi——ododе:

（ホ）ɯi→e:　手拭　tenuɕɯi——tenuɕe:

（ヘ）主格を表はす「が」・「は」、目的格を表はす「を」等の助詞の前に、e を以て終る名詞が來る場合には、其等の助詞は全く省略せられて e が長音となつてあらはれることがある。

酒は嫌ひだ　sake-wa-kiraida——sage:-kï̥re:da

酒を飲んだ　sake-o-nonda——sage:-nonda

之を讀んで　kore-o-jonde——kore:-jonde

〔註〕本書掲出「仙臺方言序ダシ」註解（33）を參照。

26　ẽ　鼻音化せられた e を意味する。例へば

蝦夷　ezo——ẽdzo

蝦　ebi——ẽbï

疣　ibo——ẽbo

行く　ikɯ——ẽŋɯ

鼠　nezumi——nẽdzumï

に於けるẽの如きこれである。又命令若くは希求を意味する「なされ」又は其の他の「れ」に當る「さえ」・「なえ」・「え」の「え」は明かに此のẽ音である。

食べさえ(「食べなされ」の義)——tabe-saẽ

おんなえ(「御出でなされ」の義)——on-naẽ

くなえ(「下され」の義)——kunaẽ

えばえ(來られよ「歩まれよの義」)——ẽ:baẽ

27 第二三節に述べた如き單獨なる母音の「い」(i)が語頭にある場合には、鼻的母音のẽに轉ずることがある。

井戸　ido——ẽdo

い(蜘蛛の巣)　i——ẽzu

28 ε:　εはeに比し開口の度の大きい「エ」音であるが、短音としてはあらはれず、多くは二母音の融合によつて生じ、長音として存する。

(イai→ε:　藍　ai——ε:

挨拶　ai-satsu——ε:-sadzu

向ひ　mukai——mugε:

境　sakai——sagε:

在郷(田舎)　zaiŋo:——zε:ŋo

謠ひ　utai——udε:

額　hitai——hïtε:

御臺(足)　godai——gõdε:

甲斐無し(弱し)　kai-nai——kε:-nε:

御詣(參詣)　o-mairi——omε:rï

(ロae→ε:　蛙葉(車前草)　kaeruba——gε:ropa

榮える　sakaeru——sagɛ:ru

前　mae——mɛ:

捕へる　tsukamaeru——tsukamɛ:ru

本條に於けるɛ及びɛ:は更に開口の度の大きいæを以て發音されることも敢て珍らしくないやうであるが、私の感じではɛの方が多いやうに思はれるから、凡てɛを以て書き表はすことにした。

29　eとɛとは一語中にありても、明かに別箇の音として區別して發音せられることがある。例へば「兵隊」he:-tɛ:に於ける前者の母音はe:、後者の母音はɛ:であり、「大抵」tɛ:-de:に於ける前者の母音はɛ:であるが如きはこれである。尚ほ類音の語（母音の長短及びアクセント等は別とし）にしてeとɛとを異にするものの若干を對照例示すれば次の如くである。

消える　ke:ru——歸る　kɛ:ru

くふ(ゑ)る（塞ぐ）　kuFeru——加える　kuFɛ:ru

目　me——前　mɛ:

30　eの鼻音化に關しては前に第二六節に於て述べたが、其の鼻音化せられる場合と、せられざる場合とを、類音の語によつて示せば次の如くである。

枝　ẽda——板　eda

井戸　ẽdo——絲　edo

螺旋　nẽdzï——熱　nedzu

即ち上段の如く、本來濁音である「だ」行諸音の前にありてはeは常に鼻音化し、下段の如く方言的特質により「た」行音が濁音に發音せられる場合には、其の前にあるeは鼻音化せられぬことと、他の母音の場合と同樣である。

E　お（o・ō:・ō）

31　o　國語の標準的の「オ」は普通にoを以て表はされて居るが、兩唇の圓みがさほど著しくない。仙臺方言に於ける「オ」も決してかゝる圓唇的の音でなく、oと開口oとの中間位にあるやうに思はれる。しばらくoを以て書きあらはす。

重い　omoi——omoï

顔 kao——kao

桶 oke——oge

32 他の母音がoに轉じたため、方言的特質を帶ぶるに至つたもの。

（イ）a→o 屈む kaγamu——koγomu

吐出す hakidasu——hogïdasu

（ロ）i→o 襷 tasuki——tasuko（又は tasugï）

左利 hidari-kiki——hïdarï-koγï

虹 niji——nodzï

（ハ）u→o 埋木 umoreγi——omoreγï

鶯 uγuisu——oγoesu

黄色 ukonko——okonko

道具 do:γu——do:γo

手拭 tenuγui——tenoγoe

〔註〕「濱荻」にも「てのごひ」とある。

沼 numa——noma

煙出 kemu-daji——kemo-dasï

婿 muko——mogo

虚無僧 komuso:——komoso:

向ふ muko:——mogo:

冬 Fuju——Fujo

露 tsuju——tsujo

螢 hotaru——ho:daro

垂氷 taruhi——tarohï

（ニ）e→o 霙雪 mizore-juki——midzoro-ʒugï

八卦おき（賣卜者） hakke-oki——hakkjo:-ogï

33 o: 主格を表はす「が」・「は」、目的格を表はす「を」等の助詞の前に、oを以て終る名詞が來る場

合には、其等の助詞は全く省略せられて、oが長音となつてあらはれることがある。

鼻緒が切れた　hanao-ŋa-kireta——hanao:-kïreda

竿が高い　sao-ŋa-takai——sao:-tagɛ:

鹽を嘗める　ʃio-o-nameru——sio:-nameru

顏を洗ふ　kao-o-arau——kao:-arau

34　ō　鼻音化せられたoを意味する。例へば

帶　obi——ōbï

お雜煮　ozo:ni——ōdzo:nï

莚　goza——gōdza

育つ　sodatsu——sōdadzu

袖　sode——sōde

綴る　tozirru——tōdzïrru

咽　nodo——nōdo

程　hodo——hōdo

に於けるōの如き、又「爲ましたよ」・「見ましたよ」等の如く句末に用ひられる「よ」の場合に使用される「お」は明かに此のō音である。

爲たお（爲ましたよ）——sïtaō

やんだお（厭ですよ）——jandaō

さうだお（然うですよ）——sō:daō

35　oが鼻音化せられる場合と、せられざる場合とを類例によつて示す。

をぢ（伯父・叔父）ōdzï——落（おち）odzï

御堂　ōdo:——音　odo

戻る　mōdoru——許　modo

伯勞（もず）（鳥名）mōdzu——持つ　modzu

即ち上段の如く、本來濁音である「ざ」・「だ」諸行の音の前にありては o は常に鼻音化し、下段の如く方言的特質により「さ」・「た」行の音が濁音に發音せられる場合には其の前にある o は鼻音

化せられぬこと、他の母音の場合と同樣である。

36 ō の後に尙ほ一二の音節が接續する場合、ō に直後せる音節中の有聲子音及び母音は無聲音化するのが常である。

小使　kozukai——kōtsu̥kɛ:

負さる(負はる)　obusaru——ōpu̥sarɯ

御無沙汰　gobusata——gōpu̥sada

37 音節間の「わたり」として隨時別箇の母音が挿入せられることがある。

來ばよい(來ればよいに)　koba-joi——koeba-e:

庖丁　hoːtʃoː——hoidʒoː

第二章　子音

A　か・が・が(k・g・ŋ)行音

38 か行音は「紙」・「黍」等に於ける如く、語頭にある場合には、ka, ki 等の如く清音に發音せられるけれども、第二音節以下にある場合には、多くの場合に於て、「床」を ʒuga、「柿」を kagi といふ如く濁音の g (閉鎖音 g であるか摩擦音 g であるか尙ほ研究を要するが姑く g を以て表はす)に轉ずる。これ仙臺方言(又一般に東北方言)が重濁に聞かれる主たる原因である。斯く第二音節以下の頭音が濁音化することは、其の直前にある母音によつて有聲音化せられた結果と見られぬことはないが、それは「小川」(o-ŋawa)が o-ŋawa となり、「千草」(tʃi-kusa)が tʃi-ŋusa となる國語一般の所謂、連濁音現象とは餘程趣を異にし、其の濁音化は全く無意識的のものであり、發音者自身は其等の濁音を尙ほ清音なりと感じて毫もあやしむ所が無いのである。畢竟此の方言にありては清濁の區別が明白に意識せられず、k・g 相合して一つのフォネームを成すものではないかと考へさせられる。此の現象がアイヌ語にも存し、[註] 又朝鮮語にも存することは比較研究上重大なる價値が存するやうに思はれる。

〔註〕金田一京助氏「アイヌ語清濁考」(「岡倉先生記念論文集」收載)

39 ka → ga　第二音節以下にある ka は多くは ga に轉ずる。

皸　akaŋire——agaŋiri

烏賊魚　ika——ega

碇　ikari——egarï

女房（御方の義）　o-kata——o-gada

但し次の如き場合には濁音化せぬ。

（a）促音の次にある場合。

帆船　hokake-bune——hokkake-bune

三日　mikka——mïkka

（b）「ん」音の次にある場合。

錠（鍵金の義）　kaŋi-kane——kan-kane

静か　ʃizuka——sïnka

聾者　——kïnka

（c）ï・u等無聲母音の次にある場合。

亂暴　kikanai——kïkanɛ:

引摑む　hiki-tsukamu——hitsukamu

40　ka→ŋa　多くの例が無い。

行かない　ikanai——ɛ̈ŋanɛ:

41　語頭にgaの濁音の來る場合。但し左記例中には他地方でも使用するものがあるかも知れぬ。

來い　koi——gae

母様　kaka-san——gaga-san

〔註〕大里が「仙臺方言」に「ガ、」を出し、「母ト云事、ガ、サン、チカ、サント呼ブ、又四五十歳以上ノ卑賤ノ婦人ヲ呼ンデガ、ト云、又ガアサマ、ガスマナド云ハ、皆カ、サマノ轉ズルナリ、鄙人ノミ用ユ。」と註してある。

容積　kasa——gasa

蟹　kani——gani

棺〔箱〕kan-〔bako〕——gan-bago

鞄　kaban——gaban

盜む（「掠める」の義か）——gameru

42 ŋa 助詞「が」はŋaであり、其の他第二音節以下に於てŋaの現はれることがある。

私が wataʃi-ŋa——wadasi-ŋa

小學 ʃo:ŋakuu——jo:ŋagu

43 kï•gï 「き」「ぎ」の發音はkï•gïである(第七節參照)。

樹 ki——kï

霧 kiri——kïrï

菊 kikuu——kïguu

44 キュ(kjuu)•ギュ(gjuu)•ギュ(ŋjuu)の發音は不可能であり、すべてkï•gï•ŋïの音に轉ずる(第八節參照)。

急に kjuu-ni——kï:-nï

窮屈 kjuu-kutsu——kï:-gudzu

牛乳 gjuu:-njuu:——gï:-nï:

水牛 suui-ŋjuu:——sue-ŋï:

45 ki→gï 第二音節以下にあるkiは多くはgïに轉ずる。

唾液 ʃitaki——sïtagï

柿 kaki——kagï

箒 ho:ki——ho:-gï

但し次の如き場合には濁音化せぬ。

(a)促音の次にある場合。

蛙 hiki——bïkkï

前方(さきがた) saki-ŋata——sakkïna

醉ふ jouu——jokkiru

(b)「ん」音の次にある場合。

いんき(洋墨) inki——enkï

御天氣 o-tenki——odenkï

(c)ï•u等無聲母音の次にある場合。

畜生 tʃikuuʃo:——tsïkïʃo:

46 ki→kï̥　iが無聲音となることがある。

規則　kisokku——kï̥sogɯ

汽車　kija——kï̥ja

あきしよ(蟹)——akïʃo

北　kita——kï̥ta

切(織物)　kire——kï̥re

着ろ　kiro——kï̥ro

無聲母音ï̥の直後にある子音は常に無聲音であり、rはr̥の無聲音に轉ずる(第一一節參照)。

47 語頭にïgの濁音の來る場合。

蠹魚　kirara-mujï——gïra-musï

48 ki→hi　kのhに轉じたもの。

焦臭　kina-kusai——hina-kuse:

49 kɯ→gɯ　第二音節以下にあるkɯは多くはgɯに轉ずる。

胃袋　ibukuro——ebugɯro

櫻(さくら)んぼう　sakurambo:——sagɯraŋo

木耳　kikuraŋe——kigɯraŋe

但し次の如き場合には濁音化せぬ。

(a)促音の次にある場合。

篤と　tokuto——tokkuto

德利　tokuri——tokkurï

能く　joku——jokku

(b)「ん」音の次にある場合。

雁首　gankubi——gankubï

先口　senkutji——senkudzï

(c)ï̥・ɯ̥等無聲母音の次にある場合。

少(ちく)と　sukoji——tsï̥kuto

50 kɯ→kɯ̥　ɯが無聲音となることがある。

裃紗　Fukɯsa——Fɯ̥kɯ̥sa

草　kɯsa——kɯ̥sa

腐る　kɯsarɯ——kɯ̥sarɯ

癖　kɯse——kɯ̥ʃe

桑　kɯwa——kɯ̥Fa

倉　kɯra——kɯ̥ra

黒　kɯro——kɯ̥ro

無聲母音ɯ̥の直後にある子音は常に無聲音であり、rはr̥の無聲音に轉ずる（第一一節參照）。

51 kɯ→ŋɯ　kのŋに轉じたもの。

つく（杖を）　tsɯkɯ——tsɯŋɯ

〔註〕大里が「仙臺方言」にも「ツク」を出し、「杖ヲツクヲツグト云、杖ノミニカギレリ。」と註してある。

行く　ikɯ——ẽŋɯ

〔註〕大里が「仙臺方言」にも「イグ」は「ユク事」と註してある。

52 ke→ge　第二音節以下にあるkeは多くはgeに轉ずる。但し本節以下第五四節に至るまでに使用したe中にはẽ・ɛ・ɛ̃等をも便宜含ませたものであり、其等の區別は夫々の場合に明記することにした。

碎（米の破片）　kɯdake——kɯdage

蜻蛉　akitsɯ——age

竹　take——tage

高い　takai——tagɛ:

但し次の如き場合には濁音化せぬ。

（a）促音の次にある場合。

搔込む　kakikomɯ——kakikomɯ

二毛猫　nike-neko——nikke-nego

じやつけ（痘痕）　ʒanko——dʒakkɛ:

厄介　jakkai——jakkɛ:

(b)「ん」音の次にある場合。

ちんけ(鬢毛)　——tsïnke

もんけ(そんな事あるもんけ)　mono-kai——monkɛ:

(c)ï。u。等無聲母音の次にある場合。

濕る　ʃikerɯ——sïkerɯ

少ない　sɯkɯnai——sɯkenɛ:

つけしごと(突返し言ひ)——tsɯkɛsï-ŋodo

深い　Fɯkai——Fɯkɛ:

53　ke→ŋe　多くの例が無い。

行け　ike——ẽŋe

54　語頭にgeの濁音の來る場合。但し左記の例は他の地方にも存するかも知れぬ。

蝌蚪(蛙子)　kaerɯŋo——gɛ:rɯŋo

車前草(蛙葉)　kaerɯba——gɛ:ropa

55　ko→go　第二音節以下にあるkoは多くはgoに轉ずる。

黄粉　kinako——kinago

大根　daikon——de:gon

香物　ko:ko:——o-go-go

仲人　nako:do——nago:do

但し次の如き場合には濁音化せぬ。

(a)促音の次にある場合。

根　ne——nekko

打壞す　ɯtʃi-kowasɯ——bɯkkowasɯ

ぽっこ(木履)　——pokko

側子(芋などの)　waki-ko——wakko

(b)「ん」の次にある場合。

握拳 genkotsu——genko

愛ぐい meŋui——menkoe

(c) i°・u°等無聲母音の次にある場合。

樵夫 kikori——kïkorï

曾孫 hiko——hïko

乳 tʃi-tʃi——tsï-ko

少し sukoʃi——sukosï

(d) 意義上比較的獨立の價値を有する diminutive の助詞「こ」・「こい」等のko音。

猫 neko——nego-ko

鳥 tori——torï-ko

牛 beko——bego-ko

小さい tʃi:sai——tsïsa-koe

圓い marui——maru-koe

堅い katai——kada-koe

56 語頭にgoの濁音の來る場合。

捏る konerru——gonerru

57 「り」・「る」等の音の次に「か」・「から」・「かへる」の如きkを以て始まる語が來る時は次の如き促音現象が起る。

有るか aru-ka——akka

起きるか okirru-ka——ogikka

來るか kurru-ka——kukka

爲るから surru-kara——sukkara

見るから mirru-kara——mïkkara

取りかへす tori-kaesu——tokke:su>tokkesu

取りかへる tori-kaeru——tokke:ru>tokkeru

58 「くわ」(kwa)・「ぐわ」(gwa)・「くゎ」(ŋwa) なる音は本來存在せず、すべて「か」(ka)・「が」(ga)・

「が」(ŋa)となるのが原則であるが、仙臺淨瑠璃(御國淨瑠璃)語り故赤井澤龍の一の淨瑠璃朗讀中では、「折りくべくわっくわっと焚きければ」・「守らしめ給へとぐわんねん(願念)して」、又「觀音」は之を「くわんのん」又は「くわんおん」と發音するなど、「くわ」・「ぐわ」の音を明かに保存して居る。併し此等は全くの口傳によるもので、仙臺方言として事實上存して居るのではない。

B　さ・ざ(s・dz)行音

59 國語「さ」行及び「ざ」行に於ける頭音(「し」及び「じ」は例外として)の標準的發音はs及びzで、明かに摩擦音とせられて居る。然るに私の發音では、「さ」行音の頭音こそはsであるが、「ざ」行音の頭音はdz即ちtsの有聲音と感ぜられる。故に私は方言の「ざ」行音をdza, dzï, dzuu,[dʒe], dzoを以て表はす。

60 「か」行・「た」行の音が第二音節以下にある場合、「柿」kakï を kagï、「刀」katana を kadana と言ふ如く、普通濁音化すべからざる場合に濁音化せしめる方言的特質の存することは、夫々の條に述べた所であるが、此の現象は「さ」行音の場合には宛てはまらない。即ち「笠」kasa は kadza「味噌」(miso は mïdzo となることが無い。此の現象は朝鮮語でも全然同樣であり、同語にありて第二音節以下の頭音にあるk・t・pが母音又は其の他の有聲音の下に續く時は容易にg・d・bになるが、sのみは有聲音化せられずに止まる。

61 前々節に述べた如く、「さ」はsa、「ざ」はdzaと發音されるが、方言中には「さ」の有聲音とでも見らるべき一種異なつた音が存して居る。即ちzと發音する場合の舌端と上齒の裏面との間に存する狹穿をもう少し緩やかにすることによつて生ずる一種の有聲的摩擦音にaを附したものであつて、屢〻zaの如く聽取される。例へば「伯母さん」(oba-san)・「姉さん」(ane-san)に於けるsaがこれであつて、此の子音を假りに ʒ を以て書き表はすならば oba-ʒan, ane-ʒan の如くなるのである。此の種の子音は i・e・o と結合することなく(iと結合したものは存しないが、東北地方に特有なる「イ」[ï]母音はïの狹穿の更に緩められたものに當るものと見られるだらうといふことは、前に第七節に述べた通りである)單に本節に述べた如くaと結合する場合と、ɯと結合する場合(第一四六節參照)とに存するだけである。

62 sï(し)・dzï(じ)　「し」は ʃi の如く發音されず殆んど「す」(sɯ̈)と同樣である。强ひて之を「す」と區

別せんと力むるにしても精々sï位のものである。凡そ「さ」行音のみに限らず、其の他の行に於ける總ての「い」列音の母音はiにあらずしてïである(第七節參照)。ïとü(本書では便宜上ɯを用ひる)とはiu間の中間音であり、iとɯとの間に存する如き發音上の明瞭な區別を缺く事實より推すも、ï:üの混同が偶然ならざるを知るに足るであらう。吾人は事實上「い」列音と「う」列音とを音字の上に區別して書く必要を認めざる幾多の場合を認めるけれども、かくては說明上不便を感ずるが故に、「し」に對してはsï、「す」に對してはsɯを用ひることとする。

鯨　suʃi——susï

氷豆腐　ʃïmi-do:Fu——sïmï-do:Fu

白　ʃïro——sï̧ro

63 濁音「じ」(ʒi)は殆んど「ず」(zɯ)と區別せられぬのが普通であるが、音字の上では便宜上dzïを以て表はす。それは私の發音では「じ」はʒの子音を以て發音するよりもdzの音に近いからである。「じ」の子音が、dzに近いものであらうといふことは、本來「じ」(ʒi)であるべき文字の直前に鼻音又は鼻的母音が存する場合に、其のʒiがtsï̧(tsはdzの無聲音)に變ずる幾多の語例を發見することが出來るからである。例へば

何時頃　nanʒi-koro——nantsï̧-koro

短い　miʒikai——mï̃tsï̧ke:

十字架　ʒɯ:ʒika——dzï̃:tsï̧ka

彈ける　haʒikerɯ——hã̃tsï̧kerɯ

の如きこれである(第一〇一節參照)。

64 「しゆ」(ʃɯ)・「じゆ」(ʒɯ)の發音は不可能であり、すべてsï・dzïの音に轉ずる(第八節參照)。

周圍　ʃɯi——sï:e

主人　ʃɯʒin——sïdzïn

わらし(子供)(童衆の義?)——warasï

〔註〕「濱荻」に「わらし」とあり、又、大里が「仙臺方言」にも「ワラシ」を「童子ノ字ナリ」と註してある。

巡査　ʒɯnsa——dzïnsa

始終　ʃiʒɯ:——sïdzï:

〔註〕「濱荻補遺」に「しびあい」を出し、「首尾合、諸役所などの都合の事」と註してある。以前も「首」(しゆ)を「し」の如く發音したことが窺はれる。

65 ʃi→si̥　iが無聲音となることがある。

鹿　ʃika——si̥ka

下　ʃita——si̥ta

白　ʃiro——si̥ro

知らない　ʃiranai——si̥ranɛ:

無聲母音i̥の直後にある子音は常に無聲音であり、rはr̥の無聲音に轉ずる(第一一節參照)。

66 ʒi　ʒi「じ」が「し」になつたもの。

始まる　haʒimaru——hasimaru

67 sɯ(す)・dzɯ(ず)　「す」はsɯであるが、「ず」は私にはdzɯの如く發音される。

藥　kusuri——kusuri

硯　suzuri——sudzuri

葛　kuzɯ——kudzɯ

勿論練習により此等の「ず」をzɯと發音すること敢て困難な譯ではない。殊に「硯」(すずり)・「鈴」(すず)の如く、第一音節に無聲のsあり、第二音節にsの有聲音たるzがある場合には、同一發音位置が二回繰返される關係上、第二音節の「ず」は容易にzに發音されるが、それとても特別の注意を拂へばこその話である。而して「ず」の子音がzよりもdzに近いものであらうといふことは

鈴子　suzuko——sutsu̥ko

疵子(小疵)　kizuko——kitsu̥ko

お葛かけ(餡かけ)　o-kuzu-kake——o-gutsu̥-kage

和ちやん(人名)　kazu-tʃan——katsu̥-tʃan

等の例に於て、本來「ず」(zɯ)であるべき文字の前に鼻的母音が存する場合に、其のzɯがtsɯ̥(tsはdzの無聲音)に變ずることにより、窺ひ知ることが出來よう。

68 sɯ→su̥　ɯが無聲音となることがある。

好かない　sukanai——sukane:

ストーブ(煖爐)　sutoːbu——sutoːbɯ

棄てる　suteru——suteru

爲れば　sureba——sureba

無聲母音ɯ̥の直後にある子音は常に無聲音であり、rはr̥の無聲音に轉ずる(第一一節參照)。

69 tsɯ→sɯ　「つ」が「す」になつたもの。

一番(一匹偶)　hito-tsuɾai——hito-suɾɛ:

70 「せ」・「ぜ」はse・zeの如くでなく、ʃe・dʒeの如く發音される(第八〇節參照)。

71 so(そ)・dzo　ぞ)　濁音「ぞ」は私ではdzoである。

嘘　uso——uso

小僧　kozoː——kōdzoː

C　しゃ・じゃ(ʃ・dʒ)行音

72 ki・hi・ʃi・kɯ・Fɯ等に於けるi・ɯ等が無聲音化し、其の次にja音が來る時は、jは其の「こゑ」を失つた上、ʃ音に轉じ、jaはʃaと發音される。

木遣(歌)　ki-jari——kï-ʃarï

冷評す　hi-jakasɯ——hï-ʃagasɯ

冷飯　hi-jameʃi——hï-ʃamesï

石山　iʃi-jama——eʃï-ʃama

西山　niʃi-jama——niʃï-ʃama

悔しがる　kɯ-jaʃiɲaru——kɯ-ʃasïɲaru

曖昧　ajaFu-ja——ajaFɯ-ʃa

但し「石山」eʃï-ʃama・「西山」niʃï-ʃama の如きは、更にeʃʃama, niʃʃamaに轉ずる。

73 ʃiに於けるiが無聲音化し、其の次にr̥を以て始まる音節が來る時は、r̥aはʃaとなるか、或はʃï̥raは更に縮約せられてʃʃaの音となる。

柱　haʃira——haʃï̥-ra, haʃʃa

汝等（「主等」の義）　nuʃira——nïʃï̥-rḁ, nïʃʃa

私等　watafira——wadaʃï̥-rḁ, wadaʃʃa

惡戯（「わるゐ」の轉）　wafira——waʃï̥-rḁ, waʃʃa

〔註〕「濱荻」に「くちわすら」とある「わすら」は此の語に當る。又大里が「仙臺方言」に「ワスラ」を出し、「ムダアソビニスル事ヲ云、童子の手ワスラナド云。」と註してある。

知らない　ʃiranai——sï̥ranɛ:, ʃʃanɛ:

74 ʃiに於けるiが無聲音化し、其の次にaを以て始まる音節が來る時は、ï̥とaとの中間にʃ音が挿入せられるか、或は ʃï̥ʃa は再轉して ʃʃa となる。

仕合　ʃiawase——ʃï̥ʃawaʃe, ʃʃawaʃe

腰上　koʃiaʔe——koʃï̥ʃaʔe, koʃʃaʔe

75 sa→ʃa　sがʃになつたもの。

去れ　sare——ʃare

〔註〕大里が「仙臺方言」にも「シヤル」・「シヤレ」に對して「ノク、ノケルコト、ジヤマニナルカラ、ソコチシヤレ

ト云類、去ノ訛ナリ。」など註記してある。

76 hja→ʃa　hjがʃになつたもの。

冷い　hjakkoi——ʃakkoe

77 za→dʒa　zがdʒになつたもの。

膝　hiza——hï̥dʒa-kabu

78 「し」はʃi、「じ」はʒiにあらずして、sï・dzïと發音せられること、第六二節に述べた通りである。

79 「しゅ」はʃɯ、「じゅ」はʒɯにあらずして、sï・dzïと發音せられること、第八節に述べた通りである。

80 ʃe・dʒe　「せ」はseにあらずしてʃe、「ぜ」はzeにあらずしてdʒeの如く發音される。

蟬　semi——ʃemï

煎餅　senbei——ʃembe:

お布施　o-Fuse——o-Fu̥ʃe

錢　zeni——dʒenï

風邪　kaze——kãdʒe

但し ai・ae の二重母音から轉成した開口の ɛ を含む場合には ʃe・dʒe とならずして s・dz（第五九節參照）音を保有する。

再々 saisai——se:se:
臭い kuusai——kuse:
牙る saeru——se:ru
さへ（助詞） sae——se:
財産 zaisan——dzɛ:san
在鄕（田舍） zaiŋo:——dzɛ:ŋo

81 ʃi 又は sɯ に於ける i 又は ɯ が無聲音化し、其の次に r̥ を以て始まる音が來る時は、re̥・rɛ̥ は ʃe・ʃɛ となるか、或は ʃɨ̥re, ʃɨ̥rɛ 又は sɯ̥re は更に縮約せられて ʃʃe, ʃʃɛ の音となる。

白粉 oʃiroi——oʃɨ̥re; oʃʃe:
面白い omoʃiroi——omoʃɨ̥roe, omoʃʃe:
知れる ʃirerɯ——ʃɨ̥rerɯ

拵へる koʃiraerɯ——koʃɨ̥rɛ:rɯ, koʃʃɛ:rɯ
忘れる wasɯrerɯ——wasɯ̥rerɯ, waʃʃerɯ

82 ʃi・tʃi・hi・sɯ 等に於ける i・ɯ が無聲音化し、其の次に e 音を以て始まる音が來る時は、i̥・ɯ̥ と e との中間に ʃ 音が挿入せられ、特にそれが i̥ と e との結合である場合には、ʃi̥-e は再轉して ʃʃe となる。

寫繪 ɯtsɯʃie——ɯdzɯʃɨ̥-ʃe, ɯdzɯʃʃe
蒸蝦 mɯʃiebi——(o)-moʃɨ̥-ʃebï, (o)-moʃʃebï
爲得ない ʃienai——ʃɨ̥-ʃanɛ:
智慧 tʃie——tʃɨ̥-ʃe
稗 hie——hɨ̥-ʃe
冷る hierɯ——hɨ̥-ʃerɯ
末無（町名） sɯe-naʃi——sɯ̥ʃe-nasï
据ゑておく sɯete-okɯ——sɯ̥ʃede-ogɯ

饐る　suerui——sɯʃerui

龍の一の御國淨瑠璃中にありても、「よろづ御意の末なれば」の「末」を sɯʃe と發音して居る。

83 de→dʒe　d が dʒ になつたもの。

撫でる　naderu——nãdʒeru

84 ki•hi•ʃi•km•tsm 等に於ける i•m 等が無聲音化し、其の次に jo 音が來る時は、j は其の「こゑ」を失つた上、ʃ 音に轉じ、jo は ʃo と發音される。

清正　kijomasa——kiʃomasa

日和　hijori——hiʃori

爲やう無い　ʃijo:nai——ʃiʃo:nai:, ʃiʃanai:

年寄　toʃijori——toʃiʃori

くよくよ　kujo-kujo——kuʃo-kuʃo

强い　tsujoi——tsuʃoe

但し、「年寄」toʃiʃori の如きは更に toʃʃori に轉ずる。

85 ʃi に於ける i が無聲音化し、其の次に ɾ を以て始まる音節が來る時は、ɾo は ʃo となるか、或は ʃiɾo は更に縮約せられて ʃʃo の音となる。

白い　ʃiroi——ʃiɾoe, ʃiʃoe, ʃʃoe

苗代　nawaʃiro——nawaʃiɾo, nawaʃiʃo, nawaʃʃo

蓆　muʃiro——muʃiɾo, muʃʃo

强い　tsuroi——tsuɾoe, tsuʃoe

86 ʃi に於ける i が無聲音化し、其の次に o を以て始まる音節が來る時は、i。と o との中間に ʃ 音が挿入せられることがある。

鹽釜(地名)　ʃio-ʔama——ʃiʃo-ʔama

鹽引(鹽鮭)　ʃio-biki——ʃiʃo-biɡi

D　た•だ(t•d)行音

87 「た」行音は「足袋」・「虎」等に於ける如く、語頭にある場合には ta, to 等の如く、清音に發音せられるけれども、第二音節以下にある場合には、多くの場合に於て「下駄」を geda、「里」を sado といふ如く濁音のdに轉じて發音せられること、「か」行音の場合（第三八節參照）と全く同一關係にある。これ本方言にありては、t及びdは本來同一フォネームに屬するものなることを物語るものではないだらうか、尙ほ今後の研究に俟つこととする。

88 ta→da　第二音節以下にあるtaは多くはdaに轉ずる。

鷄冠　itadaki——edādagï

見た　mita——mida

凧（「天旗」の義）　ten-bata——ten-bada

豚　buta——buda

木股（「六十二歳」のこと）　kino-mata——kïno-mada

但し次の如き場合には濁音化せぬ。

（a）促音の次にある場合。

雪蹈　setta——setta

ふつたびつか（蟇蛙）——Futta-bïkkï

（b）ï・u等無聲母音の次にある場合。

北　kita——kï̥ta

下　ʃita——si̥ta

したか（唾）　ʃitaki——si̥tagï

したたか（澤山）　ʃitataka——si̥tadaga

首　kubi——kũpï̥-ta

ネクタイ　nekutai——nekutai

蓋　Futa——Futa

蔦　tsuta——tsuta

89 na→da　「な」が「だ」になつたもの。

然うならば　sonaraba——sondaraba

90 ra→da 「ら」が「だ」になつたもの。

堪へる koraeru——kodaeru〉kodɛ:ru

91 「ち」(tʃi)・「ぢ」(dʒi)は「ちゃ」・「ぢゃ」行の條(第九七節より第一〇六節まで)に說く。

92 「つ」(tsɯ)・「づ」(dzɯ)は「つぁ」・「づぁ」行の條(第一〇七節より第一一四節まで)に說く。

93 te→de、第二音節以下にあるteは多くはdeに轉ずる。

お寺 o-tera——o-dera

堤 dote——dode

舍弟 ʃatei——ʃade-ko

むて(亂暴の義) mute——mude

但し次の如き場合には濁音化せぬ。

(a)促音の次にある場合。

切手 kitte——kitte

土樋(町名) tsutʃitoi——tsutte:

勿體無い mottai-nai——motte:ne:

(b)ï・ɯ等無聲母音の次にある場合。

來てる kite-iru——kïteru

終日 hihite——hïhïte

單物 hitoe-moro——hïtoe-mono

棄てる suteru——sutteru

傳手 tsute——tsutte

94 to→do 第二音節以下にあるtoは多くはdoに轉ずる。

座頭(盲人) zato:——dzado:

仕事師(人足) ʃiɲotoʃi——sïɲodosï

五德 gotokɯ——godogɯ

一昨年 ototoʃi——ododosï

到頭 to:to:——to:do:

但し次の如き場合には濁音化せぬ。

(a)促音の次にある場合。

一寸　tʃotto——tʃotto

つっとる（仰ぐ）——tsuttoru

ぼつと（不圖）——botto

(b)ï。•ɯ。等無聲母音の次にある場合。

びしと（屢）——bisïto

ひとしきり（一度）——hitosïgïri

ちくと（少）——tsïkuto

踵　——akuto

甲　kabuto——kãputo

瘤取　kobutori——kõputorï

95 語頭にdoの濁音の來る場合。但し例中には他地方で使用するものあるかも知れぬ。

堰　tome——dome

魚（小兒の用語）　toto——dodo

96 「り」•「る」•「れ」等の音の次に「た」•「と」の如きtを以て始まる語が來る時は、次の如き促音現象を呈することがある。

緩りと　jururito——ʒurutto

けろりと　kerorito——kerotto

爲ると　suruto——sutto

叱られた　ʃikarareta——sïkaratta

E　ちゃ•ぢゃ（tʃ•dʒ）行音

97 tʃa（ちゃ）は明かに存する。「ぢゃ」は私の發音では$ʒ^a$よりも$dʒ^a$に近い。故に「ぢゃ」を$dʒ^a$で表はす。

98 $tʃ^a$→$dʒ^a$　第二音節以下にある$tʃ^a$は多くは$dʒ^a$に轉ずる。

お茶　o-$tʃ^a$——o-$dʒ^a$

但し次の如き場合には濁音化せぬ。

(a) 促音の次にある場合。

無茶　mutʃa——muttʃa

彼方へ　atʃirae——attʃa

何方へ　dotʃirae——dottʃa

べっちゃ(「だらう」を意味する句)——bettʃa

(b) ï̥•ɯ̥なる無聲母音の次にある場合。

葡萄茶　ebitʃa——ēpï̥tʃa

〔滅茶〕苦茶　〔metʃa〕-kutʃa——〔metʃa〕-kuṭʃa

99 sa→tʃa　「さ」が「ちゃ」になつたもの。

倒ま(「反樣」の義)——kɛ:tʃa

〔註〕「濱荻」「しりをかいちやにしてさはぐ」(倒になつてさはぐ)とある「かいちや」は此の語に當る。

小さい　tʃi:sai——tsïttʃae, tsïttʃɛ:

さっさと　sassato——tʃattʃado

三十尺　sanʒɯʃʃakɯ——sandzïttʃagɯ

100 tsï(ち)•dzï(ぢ)　「ち」はtʃiの如く發音されず、殆んど「つ」(tsɯ)と同音である。若し力めて之を「つ」と區別せんとすればtsï位の音と見ればよからう。かく當方言にありては「ち」•「つ」の區別は事實上殆んど存せざるが故に、音字の上に之を區別して表記する必要無き如く思はれるけれども、かくては說明上各種の不便を感ずるが故に、「ち」に對してはtsï、「つ」に對してはtsɯを用ひることとする。

血　tʃï——tsï

地圖　tʃïzɯ——tsïdzɯ

101 又「ぢ」は本方言では殆んど「づ」と區別せられぬのが普通であるが、音字の上では便宜上dzïを以て表はす。それは私の發音では「ぢ」はるの子音を以てするよりもdzの音に近いからである(「じ」の子音もdzに近いこと第六三節參照)。「ぢ」の子音がdzに近いものであらうといふことは

紫陽花　aʒïsai——ãtsïʒsɛ:

意地張　iʒi-hari——ẽtsi̥-pari

等の如く本來「ぢ」(ʒi)であるべき文字の直前に鼻的母音が存する場合に、其のʒiがtsï̥(tsはdzの無聲音)に轉ずる幾多の例を發見することが出來るからである。

102 「ちゅ」(tʃɯ)・「ぢゅ」(ʒɯ)の發音は不可能であり、すべてtsï・dzïの音に轉ずる(第八節參照)。

忠義　tʃɯ:ŋi——tsï:ŋï

注意　tʃɯ:i——tsï:e

昆蟲　kontʃɯ:——kontsï:

重箱　ʒɯ:bako——dzï:bago

103 tʃi→dzï　第二音節以下にあるtʃiは多くはdzïに轉ずる。

苺　itʃiŋo——edzïŋo

蜂　hatʃi——hadzï

脣　kɯtʃibirɯ——kɯdzïbera

土　tsɯtʃi——tsɯdzï

命　inotʃi——enõdzï

鉢　hatʃi——hadzï

但し次の如き場合には濁音化せぬ。

(a)促音の次にある場合。

きっち(木造物置)——kittsï

啞　oʃi——ottsï

(b)「ん」音の次にある場合。

文鎮　bɯntʃin——bɯntsïn

ベンチ　bentʃi——bentsï

104 ʒi→tsï̥　「ぢ」即ちʒi(本方言ではdzï音たるべきこと第一〇一節に既說)の直前に鼻的母音が有り、尙ほ其の後に一二の音節が接續する場合には、ʒiは全部「こゑ」を失つてtsï̥となる。

紫陽花　aʒisai——ãtsï̥se:

意地張り　iʒi-hari——ẽtsï̥-pari

縮こまる　tʃiʒikomaru——tsĩtsɨkomaru

肘立て　hiʒitate——hĩtsɨtade

105 ʒi→tsɨ　「じ」即ちʒi(本方言ではdzi音たるべきこと第六三節に既說)の直前に鼻的母音が有り、尙ほ其の後に一二の音節が接續する場合には、ʒiは全部「こゑ」を失つてtsɨとなる。

鰍　kaʒika——kãtsɨka

彈ける　haʒikeru——hãtsɨkeru

端　haʒi-he——hãtsɨ-pe

かじける(枯凋)　kaʒikeru——kãtsɨkeru

軒下　nokiʒita——nugĩtsɨta

短い　miʒikai——mĩtsɨkɛ:

古城(地名)　Furuʒiro——Furũtsɨro

十字架　ʒu:ʒika——dzĩtsɨka

此等は方言に於ける「し」の濁音が事實上dz音を頭音として居ることを證するものと見ることを得

ないだらうか。

106 ʃi→tsi　「し」が「ち」になつたもの。

をかしい　okaʃi:——ogatsi:

〔註〕本書掲出「仙臺方言序ダシ」註解(19)を參照。

末子　baʃʃi——battsi

啞　oʃi——ottsi

びっしり(屢)　biʃʃiri——bittsiri

F　つぁ・づぁ(ts・dz)行音

107 「づぁ」は「ざ」(dza)と同じにひゞく(第五九節參照)。而して此のts・dzは語頭には起らず、「さ」行音の代りとして多くは促音又は「ん」音の後に現はれる。

眞先　massaki——mattsagi

十冊　ʒissatsu——dzittsadzu

裂ける　sakeru——buttsageru

兄さん　oanisan——oantsan

をぢさん（伯父叔父）　ojisan——ontsan

108 「つ」はtsɯであるけれども、「づ」は私の發音ではzɯよりも寧ろdzɯに傾く。「ず」の發音もdzɯの如くひびく（第六七節參照）。

先づ　mazɯ——mädzɯ

地圖　tʃizɯ——tsïdzɯ

清水小路（町名）　ʃizɯ-ko:zi——sïdzɯ-go:dzï

109 tsɯ→dzɯ　第二音節以下にあるtsɯは多くはdzɯに轉ずる。

札（紙幣）　satsɯ——sadzɯ

夏　natsɯ——nadzɯ

鰹　katsɯo——kadzɯo

田づくり（ごまめ）　tatsɯkuri——tadzɯgurï

但し次の如き場合には濁音化せぬ。

（a）促音の次にある場合。

〔腹〕苦しい（滿腹）　kurɯʃi:——kuttsï:

〔註〕「濱荻」に「くつちひ」とあり、又大里が「仙臺方言」には「クツチイ」に對し、「クルシイト云事、腹ノミチテクルシキニ用ユ。」と註記してある。

手作ろひ（手振）　tetsɯkuroi——tettsɯgurɯ:

（b）「ん」音の次にある場合。

金鍔　kintsɯba——gïntsɯba

劍突　kentsɯkɯ——kentsɯgɯ

110 dzɯ→tsɯ。「づ」（dzɯ）の直前に鼻的母音が有り、尙ほ其の後に一二の音節が接續する場合には、dzɯは全部「こる」を失つてtsɯ。となる。

預る　adzɯkarɯ——ätsɯ̥karɯ

託（かづ）ける　kakodzɯkerɯ——kätsɯ̥kerɯ

六敷い　mudzukaɲi:——mũtsu̯kasɨ:

蹼　midzukaki——mĩtsu̯kagɨ

靜か　ɲidzuka——sɨ̃tsu̯ka

小使　kodzukai——kõtsu̯kɛ:

恥かしい　hadzukaɲi:——hãtsu̯kasɨ:

紙屑籠　kamikudzu-kaɲo——kamɨkũtsu̯-kaɲo

111 sɯ→tsɯ　「す」が「つ」になつたもの。

眞直　massuɲu——mattsuɲu

くすぐつたい　kusuɲuttai——kuttsuɲute:

〔註〕大里が「仙臺方言」にも「クツグタイ」を「江戸ニテコソバイト云」と註してある。

〔註〕「濱荻」「よこざ」の解說文中に「横座にぶつつはつていごかぬ」とある「つはつて」は「坐つて」の義である。

112 tseは語頭に起らず、多くは次の如き場合に現はれる。

(a)「さ」行音の代りとして「ん」音の下に。

下され　kudasare〉kuntsɛ

〔註〕「濱荻補遺」に「くんさい」を出し「くんされとも、被下といふこと。」と註し、大里が「仙臺方言」に「クンザイ」・「クンザレ」を出し、「クレヨ、クダサレト云事、コフシテクンサイ、茶デモクンサレナド云類ナリ。」と註せるは此の語に當る。

(b)助詞「ぜ」の代りとして、促音・「ん」音・無聲母音等の下に。

來るぜ　kuru-ze——kuttse

善がすぜ(善いですぜ)　jo:gasu-ze——jogasuu-tse

御座りませんぜ　gozarimasen-ze——godzariɛn-tse

然うですぜ　so:desu-ze——so:desu̯-tse

行きますぜ　ikimasu-ze——igɨsu̯-tse

113 se→tse　「せ」が「つぇ」になつたもの。

猫背中(傴僂)　neko-senaka——nego-tsenaga

114 tsoは語頭には起らず、多くは次の如き場合に現はれる。

(a)「さ」行音の代りとして促音の下に。

御馳走　gotʃiso:——gottso:

のっつぉ（浮浪者「のそのそ」の義か）——nottso:

（註）大里が「仙臺方言」にも「ノヅツウ」を出し、「ノッツウ者トハ無能ノ人間ヲ云、ノッツウアルキトハ、無用ノ間出スルヲ云、ノツツウコカストハ徒ラニ日月ヲ送ルヲ云。」と註解を施して居る。

(b)助詞「ぞ」の代りとして、促音・「ん」音・無聲母音等の下に（第一一二節參照）。

見るぞ　miru-zo——mittso

分りませんぞ　wakarimasen-zo——wagariien-tso

書きますぞ　kakimasu-zo——kagiisu-tso

G　な（n）行音

115 な行音に關しては特に述ぶべき事とては無いが、唯「に」はpiの如く口蓋音化せられることなくしてniの如く發音される。「日本」をni-hop と發音するが如きこれである。

116 ニュ（pu）の發音は不可能であり、すべてniの音に轉ずる（第八節參照）。

入學　pu:-ɣaku——ni:-ɣagu

牛乳　gju:-pu:——gi:-ni:

117 つまり「入學」は「にいがく」、「牛乳」は「ぎいにい」の如くひゞくのである。

dzi（じ・ぢ）・dzu（ず・づ）で終る語の下に指定の助動詞「だ」（da）が來る場合には、dzi・dzuはnとなり、daはtaに變ずる。

火事だ　kadzi-da——kan-ta

十二時だ　ʒu:nidzi-da——dzi:ni:n-ta

上手だ　dʒõ:dzu-da——dʒo:n-ta

筈だ　hãdzu-da——hã:n-ta

118 n音の添加せられるもの。

(a)語頭に添加せられる場合。

然うだ　so:da——nda

然うなら　so:nara——ndara

はい（答辭）——nne

〔註〕「濱荻」に「ない」を以て表はし、大里が「仙臺方言」には「ナイ」・「ナァイ」・「ムナイ」を出し、「スベテ人ニ答ルニ用ユ、但卑賤ニ對シテハ用ヒズ。」と解說を加へ、「方言達用抄」には「うない」とし、「答聲、なつとくしたる應答の聲にて、雅言は唯々と云、通言にては、はいなどなるべし。」と註して居る。

（b）音節間に挿入せられる場合。

厭だ　ijada——janda

〔註〕大里が「仙臺方言」にも「ヤンダ」「ヤンダガル」を出し、「イヤジヤト云事、イヤガルチヤンダガル、イヤデゴザルチヤンデゴザル、ヤダイスナド云。」と註記してある。

羂　wana——wanna

此れ外　kore-hoka——kore-honka

反古　hoγo——honγo（hoγγo）

べそをかく　beso-o-kaku——bendzo:-kagu

〔註〕大里が「仙臺方言」にも「ベゾチツクル」・「ベンゾチツクル」・「ベンゾチカク」を出し、「小兒ノ啼キ面スル事。」と註して居る。

貝子　kaiko——kenko

羽子板　haγo-ita——hanγo-eda（haγγo-eda）

俎　mana-ita——manna-eda

屆く　todoku——tondzugu

二度　nido——nindo

〔註〕大里が「仙臺方言」にも「ニンド」を出し、「二度ノ訛ナリ」と說明して居る。

（c）語尾に添加せられる場合。

丈夫　ʒo:bu——dʒo:bun

幽靈　ju:rei——ju:ren

腋香　wakiγa——wagiγan

119　ら行音の下に「な」行音又は「だ」行音が來る時は、「ら」行音はnに轉ずることがある。

爲るな　suru-na——sun-na

足らない　tara-nai——tan-nɛ:

食はれない　kuwareｍ-nai——kan-nɛ:

晝寢　hiruｍ-ne——hin-ne

此れ限りだ　korekiri-da——korekïn-da

獨りで　hitori-de——hiton-de

誰でも　dare-demo——dan-demo

まかんでる（參上する）　makari-deruｍ——magan-deruｍ

然うだけれども　so:dakere-domo——sodaken-domo

最後の「然うだけれども」は sodakentomo の如くdoをtoともいふ。

H　は（h）行音

120 「は」行の方音は古く「ふぁ」（Fa）行音に發音されたやうであるが（「ふぁ」行音の條參照）、今日「ふ」に於てF音を認むる外、「は」・「ひ」・「へ」・「ほ」はすべてh音に呼ばれる。而して「ひ」に對しては çi と書するを可とするかも知れぬが、本書にありては姑く之をhïと記す。

121 ʃ→hi　ʃa・ʃo等がhja・hjo等となつたもの。

尺八　ʃakuhatʃi——hjakuhadzï

御相伴　o-ʃo:ban——o-hjo:ban

I　ふぁ（F）行音

122 Fa 「は」行音は現在に於てはha・hï・Fｍ・he・hoの如く發音されるが（「は」行音の條參照）、古老中には間々此の行全體に亘り兩唇摩擦のFを頭音として發音するものがある。龍の一の御國淨瑠璃中に

六波羅　rokuhara　を　rokuFara

五條の橋　hajï　を　Fasï

遙かに　harukani　を　Farugani

打出の濱　hama　を　Fama

月見花見　hanami　を　Fanamï

など發音するが如きは、其の方言的特質を傳へたものといふことが出來よう。式亭三馬の「浮世風呂」盲人が仙臺淨瑠璃を語る文句の中に「扨早(ふはや)」・「傍あたりの鼻(ふはな)が」などあるが如きも、古くFa音の存在を物語るものである。

又今日の發音で、「さうしてふぁ」・「それからふぁ」等の如く、感歎の意味に於てしばゞくFaを發音することがある。「濱荻」に「なにはよがいすぺす」(「なあによがすぺい」即ち「なあによいでせう」の義)などある「は」、又大里が「仙臺方言」に「ハァ」及び「ハ」を出し、其の說明に

「スベテ詞ノ下ニ用ユ。ネベイハァ、ヲキベイハァ、ヨカンベイチャアハァ、イクカハァ、カヘルカハァト云類ナリ、又略シテ、ハトバカリモ云事アリ。」

といへる「ハァ」・「ハ」も、此の語に屬する。

123 「わ」(wa)の音の前に無聲母音ɯ̥がある場合には、waはFa音に轉ずる。

桑・鍬　kuwa——kɯ̥Fa

食はない　kuwanai——kɯ̥Fanɛ:

詳しい　kuwaʃi:——kɯ̥Fasi:

企てる　kuwadateru——kɯ̥Fadaderu

くふぁる(塞がる)——kɯ̥Faru

〔註〕「濱荻」に「くはる」とあるは、此の語に當る。

腑分(解剖)　Fuwake——FɯFage

ふわふわ(軟)　Fuwa-Fuwa——FɯFa-FɯFa

御國淨瑠璃でも

不和　Fuwa——FɯFa

など發音して居る。

124 Fï　古老中には「ひ」をFïの如く發音する者がある。

火　hi——Fï

晝間　hiruma——Fïruma

雛　hijoko——Fïjokko

瞳孔　hitomi——Fïtomï

柄杓　hiʃaku——Fïʃagu

125 bi→Fï　「び」がFï又はhiになつたもの。

鳶　tobi——to:Fï, to:hï

土瓶　dobin——doFïn, dohïn

126 Fɯ　「ふ」は多くの場合に於てFɯである。

船　Fune——Fune

風呂場　Furoba——Furoba

札　Fuda——Fuda

127 Fe　古老中には「へ」をFeの如く發音する者がある。又waeの前に無聲母音ɯ̥が來るやうな場合にはwaeはFε:の如くなる。

くふえる(塞ぐ)——kuFeru

〔註〕「濱荻」「くえる」は此の語をあらはしたもの、又「かつくへろ」の「くへろ」は此の語の命令形である。

加へる　kuwaeru——kuFε:ru

銜る　kuwaeru——kuFe:ru

128 Fo　古老中には「ほ」をFoの如く發音する者がある。前掲三馬の「浮世風呂」仙臺淨瑠璃中に「さる程に」・「九郎判官義經」などあるは、古くFo音の存在を證するものといふことが出來よう。

又wauの前に無聲母音ɯ̥が來るやうな場合には、wauはFo:の如く發音される。

加ふれば　kuwaureba——kuFo:reba

J　ぱ・ば(p・b)行音

129 「ぱ」行音は熟語として現はれ來ること敢て珍らしくはないが、茲には稍々方言的特質を帶びた若干語を例示する。

邪魔張り　ʒama-hari——dʒama-pari

酒浸り　saka-bitari——saga-pïtarï

鰹節　katsuo-buʃï——kadzu-pusï

知った振（ぞかしら）　ʃitta-Furi——sʲïta-purï

影法師　kaʔe-boːʃi——kaʔe-posï

130　ba→pa　無聲母音ï・ɯ̥等の次にあるbaはpaとなる。

少し許り　sukoʃibakari——sukosʲïpari

嘴　kutʃiba.ʃi——kutsʲïpasï

朽葉色　kutʃiba-iro——kutʃʲïpa-ero

一番　itʃiban——etsʲïpan

松原　matsubara——matsʲïpara

131　ma→pa　無聲母音ɯ̥の次にあるmaはpaとなることがある。

集まる　atsumaru——atsʲïparu

132　bi→pï　無聲母音ï̥の次にあるbïはpïとなることがある。

口火　kutʃibi——kutsʲïpï

133　bi→pï̥　鼻母音の次にbï音あり、尙ほ其の後にk・ʃ・t等の子音を頭音とする音節が續く時は、

bはpとなるのみならず、ïも「こゑ」を失つてï̥となる。

度々　tabi-tabi——tãpʲï-tabï

急須　kibiʃo——kĩpʲïtʃo

首　kubi——kũpʲïta

盜人　nusubito——nusũpʲïto

蝦子　ebi-ko——ẽpʲï-ko

葡萄茶　ebi-tʃa——ẽpʲï-tʃa

帶子　obi-ko——õpʲï-ko

134　bɯ→pɯ̥　鼻母音の次にbɯ音あり、尙ほ其の後にk・s・t等の子音を頭音とする音節が續く時は、bはpとなるのみならず、ɯも「こゑ」を失つてɯ̥となる。

座布團　zabuton——dzãpʲuton

甲　kabuto——kãpʲuto

被せる　kabuseru——kãpʲuseru

羽二重　habutae——hãpuṭɛ:

藪蚊　jabuka——jäpuka

眼瞼　mabuta——mãputa

あぶかしい（もどかしい）　abukaʃi:——ãpukasi:

しぶとい（大膽）　ʃibutoi——sĩputoe

つぶこ（おはじき）　tsubuko——tsũpuko

根深（葱）　nebuka——nẽpuka

〔註〕「濱荻」に「ねぶか」とある。

御無沙汰　gobusata——gõpusada

負さる（負はる）　obusaru——õpusaru

〔註〕「濱荻」に「うぶさる」とある。

瘤取　kobutori——kõputorï

135 mɯ→pɯ　鼻母音の次にあるmɯはpɯとなることがある。

煙たい　kemutai——kẽpuṭɛ:

136 me→pe　無聲母音の次にあるmeはpeとなることがある。

集める　atsumeru——atsuperu

137 bo→po　無聲母音の次にあるboはpoとなることがある。

かんじよ坪（便所）　kanʒo-tsubo——kandʒo-tsupo

138 m→b　「ま」行音が「ば」行音になつたもの。

歩む　ajumu——ẽ:bu

噛みつく　kamitsukku——kabudzugu

くちはみ（蝮）　kuṭʃihami——kuṭsïhabï

139 語頭にb音の來る場合。

蛭　hiru——bïru

鰭　hire——bïre

蛙・蟇　hiki——bïkkï

ひよつと(突然・不圖)　hjotto——botto

K　ま(m)行音

140　b→m　「ば」行音が「ま」行音になつたもの。

黍團子　kibi-daŋŋo——kimi-daŋŋo

滑る　suberu——sumeru

141　ŋɯ→mɯ　「ぐ」が「む」になつたもの。

嗅ぐ　kaŋɯ——kamɯ

142　語頭にmを發音するもの。

伯母さん　obasan——mbasan

乳母　uba——mbaja

馬　uma——mma

奪合ふ　ubai-aɯ——[mbajaɯ]>bajaɯ

143　音節間にmの挿入せられる場合。

擬寶珠　gibofi——gimbo

二枚　nimai——nimme:

昨夕　ju:be——ʒumbe

手毬　temari——temmari

小袋(財布)　kobukuro——kombugɯro

牛蒡　gobo:——gombo

子守　komori——kommori

144　mの脱落するもの。

饂飩　um-men——u:men

L　や(j)行音

145　「や」・「よ」は一般に二重母音ia・ioの如く輕く發音されるけれども、次の如き場合にありては、i

は著しく子音的となり、j^a・joの如く發音されるやうである。

山　iama——jama

言はれた　iwareta——jareda

夜　iorɯ——jorɯ

146　本方言中にはzとjとの中間位置に於て發音せられるz類似の音(ʑを以て表はす)あることは既に前にも述べた通りであるが(第六一節參照)、「や」行中の「ゆ」(jɯ)は此の子音とɯとの結合によつて發音される。「伯母さん」の「さん」が「ざん」の如く聞かれると同一關係に於て、此の場合に於ける湯(jɯ)・雪(juki)以下諸語のjɯは「ʑ」の如く聞かれるのである。

湯　jɯ——ʑɯ

雪　juki——ʑugï

柚子　juzɯ——ʑũdzɯ

百合　juri——ʑurï

夕わり(夜業)　juːwari——ʑuːwarï

岩　iwa——ʑɯwa

〔註〕「濱荻補遺」に「ゆわ」とある。

善くない　jokunai——ʑugune:

〔註〕「濱荻補遺」にも「ゆくない」とあり、大里が「仙臺方言」にも「ユクナイ、ユクスル」を出し、「ユクトハ ヨクト云事」と註してある。

鰯　iwaʃi——ʑɯwasï

ʑ音の現はれるのはa及びɯと結合する場合のみに限られ、他の母音との結合に當つては現はれることがない。

147　原音がeたるとieたるとoiたる等に拘らず、次の如き語にありてはjeが現はれる。但しこれは老人に多い。

江戸繪(綿繪)　edo-e——jẽdo-e

餌　e——je

鰓　era——jera

襟　eri——jeri

遠藤　endo:——jendo:

烏帽子　eboʃi——jebosï

えせる　eserɯ——jeʃerɯ

〔註〕大里が「仙臺方言」に「ヱセル」・「ヱセチハル」・「ヱセツパリ」とせるは、これで「皆ワザト妨チナシ又ハ負チトラヌ心ニ用ユ、ヱセテサワグ、ヱセテ動カス、ヱセハジメテカラハ承知セヌナド云類ナリ。」と註記して居る。

刳る　eɲɯrɯ——jeɲɯrɯ

良い　joi——je:, e:

家　ie——je:

M　ら（r・ɾ）行音

148 「ら」行音の子音が舌端の振動を伴ふものであるか否かに就いては、尙ほ多くの人々の實驗に俟たねばならぬが、私の感じでは、多くの地方の「ら」行音と同じく振動現象を伴はぬやうである。但しɾa・ɾe等の如くrが無聲音化する場合には、たしかに幾分の振動を感ずる。

149 ki・tʃi・hi・kɯ・tsɯ・Fɯ等に於けるi・ɯ等が無聲音化し、其の次にra音が來る時は、rは其の「こゑ」を失つてɾとなる。

きらず（豆滓）　kirazɯ——kïɾãdzɯ

散らす　tʃirasɯ——tsïɾasɯ

掌　teno-hira——teno-hïɾa

平たい　hiratai——hïɾatɛ:

徒競爭　hasekura——haʃekɯɾa

食ふ　kuraɯ——kɯɾaɯ

食はせる（打）　kurawaserɯ——kɯɾaʃerɯ

土藏　kura——kɯɾa

暗闇　kura-jami——kɯɾa-jamï

面　tsura——tsu̯ra

ふらふら　Fura-Fura——Fu̯ra-Fu̯ra

但しʃi̯の次にraが來る場合には、rは無聲音化するのみならず、ʃi̯raは更に縮約せられてʃʃaとなることが普通である（第七三節參照）。

柱　haʃira——hasi̯ra>haʃʃa

知らない　ʃiranai——ʃi̯ranɛ:>ʃʃanɛ:

拵へる　koʃiraeru——kosi̯rɛ:ru>koʃʃɛ:ru

150 「り」は:riに發音される。又「りゅ」（rjɯ）の發音が不可能であり、すべて:riの如くなる。

獵師　karjɯ:do——kar:i:do

琉球　rjɯ:kjɯ:——r:i:gi:

留學　rjɯ:ŋakɯ——r:i:ŋagɯ

151 無聲音化せられたi̥の次にあるrは無聲音化せられることがある。

知りません　ʃirimasen——si̥ri̥masen

152 ki•ʃi•tʃi•hi•kɯ•sɯ•tsɯ•Fɯ等に於けるi•ɯ等が無聲音化し、其の次にre音が來る時は、rは其の「こる」を失つてr̥となる。

切れ（反物）　kire——ki̥re

知れない　ʃirenai——si̥rɛnɛ:

散れば　tʃireba——tʃi̥reba

鰭　hire——hi̥re

位　kurai——ku̥rɛ:

吳（地名）　kure——ku̥re

爲れば　sureba——su̥reba

連子　tsureko——tsu̥reko

降れ　Fure——Fu̥re

但しku̥re:, tsu̥re等の場合に於て、u̥rが全然消失してke, tse の如く變ずることがある。

吳れる　kureru——ku̥reru>koru

〔註〕「濱荻」に「ゆうくれろ」(湯をくれ)とある「くれろ」、又約音して「けろ」とあるは、何れも此の語の命令形である。

連れて行く　tsurete-ikuu——tsuɾede-eguu > tsede-eguu

153 ki•ʃi•hi•kɯ•Fɯ等に於ける i•ɯ 等が無聲音化し、其の次に ro 音が來る時は、r は其の「こゑ」を失つて ɾ となる。

記錄　kirokuu——kiɾogu

白　ʃiro——siɾo

爲ろ　ʃiro——siɾo

廣い　hiroi——hiɾoe

黑川　kɯrokawa——kɯɾogawa

風呂場　Fɯroba——Fɯɾoba

但し ʃi の後に ro が來る次の如き場合には、r は無聲音化するのみならず、ʃiro は更に縮約せられて ʃo となる(第八五節參照)。

後　ɯʃiro——ɯsiɾo > ɯʃo

苗代　nawaʃiro——nawasiɾo > nawaʃo

N　わ(w)行音

154 「わ」行音は「わ」(wa)に w 音を存するのみであり、「ゐ」•「う」•「ゑ」•「を」等は「あ」行の「い」•「う」•「え」•「お」と同音である。此の行の音に就いては特に說明すべき事は無いが、次の例は「や」の「わ」に轉じた例である。

賑やか　niʒijaka——niɾiwaga

〔註〕大里が「仙臺方言」に「ツウェ」を出し「ツェノ轉ナリ、杖ノ事。」と註せるを見れば、「杖」は古くtsuwe の如く發音されたことがわかる。

O　音倒置(Metathesis)

155 音の位置を倒置する例である。

小便　ʃo:ben——ʃombe

玉蜀黍　to:kibi——to:miïŋï

下手　heta——dahe

惡戯　warusa——wasïga

〔註〕（1）「濱荻」「くちわすら」の解説中にも、「わすらはわるさの轉」としてある。

〔註〕（2）本書掲出「仙臺方言序ダシ」註解（41）を參照。

濱　荻

いときなかりしより、みちのおくのおほんあるじなりける姫君の御かたはら近くつかふまつりけるが、おもはずなる仰ごと有て、其みくにに下り參りしに、人のものいひしただみて、聞わかぬことのみぞおほかりける。音にきくえぞが千島に來りけるにや、はた王さうくんとやらむのためしも今身の上に思ひつゞけつゝ、日を經るまゝに、かけまくもかしこき御惠より、御かたがたのうつくしみも大方ならぬにおもひまぎれて、後はただ何事もこの國ぶりにうつりもて行つゝ、もとより住なれし□□にかはらずなんなりにける。やがて十とせ餘りをへてふたゝびむさしの府にかへり參りたれば、行こふ人のものいひはさら也、其てぶりまでもむかしにかはり、□□國のやうにおもひなりぬ。いかに人わらへなることやおほかりけむ。いでやわがみ國はたゞえびすてふもののごと人毎にいふめれど、そははてしなく廣きみさう末ゐなか家たつ所のものこそあれ、おまし近きわたりなどは、かへりて古きふみにもかよひ、都ちかきこともおほかるに、などかさしもいふらん

とおもひはたゞに過むもほいなきものから、施子のぬしを始、ふたりみたり打かたらひつゝ武藏みちのくのことの葉をあつめ、みさうの末なるゐなかうどの詞、またむさしのことくさにも、たはれたること、下す〳〵しき言葉にはしるしをくはへ、ものゝはかせめし人にたよりて、其ゆへよしをも註しつ。これかれかよはしてかうがへぬればげに難波の芦は濱荻とやらんになむ。かゝるものごとに見すべきにしもあらねど、つれ〴〵なる折、ひとり昔を忍ぶつまともなし、年わかきおもとたちの、ゆくりなくこの府にのぼり、萬のことまばゆくして、人にもとひはかるべきたづきなき時のたすけともなさんとて、秋の夜のなが〳〵しうかきあつめぬるも、はるの日ののどけき御代に生れあひぬる身のさちこそありけれ。

匡　子

註者いへらく、寒鄉書にとぼしく、しかも懶惰にして他に搜索するの力なく、唯かたはらなる和名鈔のたぐひもて校合しつれば、もれたるもの少からず。事のあやまりもさはにやあらむ。はたこのえらびは俚しき詞を改しめんとのあらましなるに、世に奇を好むもの多ければ、柳巷花街のたはれごとをおほく、農工商買のだみたる言の葉をも中〳〵なりとてもてはやさんは、作者の、本意にあらざるべし。これにたゝへむは嗚呼がましけれど、式部が物語も□はう勸善懲惡をむねとしてつくりしものなるが、かへりてすきずきしき心をいざのふ媒なりなど、おもひたがふる人もあれば、よしなし事に贅するのみ。無何有の（以下缺）

濱　荻

仙臺　伊　江戸

いろ〳〵ぎり　とうふなど色々に切たるをいへり。

いろつけやき　色付燒、しやう油にて色を付也、醬油引燒ともいふ。調理の方にては少し差別あるにや。江戸にて色付といふはわざと色をつけしをいふとぞ。おほやけの所にてはいろ付煮といふあり。

いぼむし　和名鈔蟷螂以保無之利。

いほらばしる　田舍詞、本吉郡歌津邊の詞なりとぞ。

いとしり　糸尻、茶碗入などの底を糸にて切故、糸切ともいへり。

つけやき（つけひとり共）

かまきり

ふちまたら

いとそこ（からたいとも）

いとく煮　いとこ煮とも、小豆汁にて種々のものを入て煮し也。江戸にてもいとこ煮といへり。　むしき汁

いちぐんついはふ　罪の輕重によりて一郡追放より二郡三郡も有。　所はらひ

いぢこ　わらにてふごの如くつくりし物也。田舍にてこれに小兒をいれ、うつばりより綱をさげてつり置。小兒目をさまして泣けばをしうごかす。ゆすらるゝとおもひ、なきやみ、よくいぬるといへり。いぢめ。上野ゆき。越後江戸近在にてはつぐらといふとぞ。

いちからなき　朝寢して床をはなれかね、又は寒き折外へいづるをなんぎがりて、内にこもりおるたぐひをいへり。　ぶしやう

いちことをする　ねだりごとする也。　ねたる

いちじやうになっていふ　一丈程になつていふ心。ゐたけ高といふが如し。　いつはいをいふ

いぬこ　狗子。いぬころとも。跡にこをつけていふもの多し。ねこご、がへるこ、からすこ、たぐひ猶あるべし。和名鈔狗惠沼犬子也。　こいぬ

いぬこ柳　いぬころ柳とも。柳の芽ざし小犬の毛に似たれば也。　めはり柳

いぬつゝじ　和名鈔羊躑躅以波豆々之一言毛知豆々之。いぬはすべていやしむ詞なり。犬蓼犬さくらのたぐひなほおほし。唐山にて馬といふたぐひなり。　もちつゝじ

いぬわし　犬鷲。眞鳥より黑く稍小さし。

いぬがん　犬鴈類に黑白の文あること四十からの如し。眞鴈は田におる。この鴈は畑にもおりて麥などはめり。味も劣れり。にゐかた鴈共。　四十から鴈（玉まき鴈とも）

いぬくゞと　犬潛戸なるべし。　いぬくゞり

いぬつくばひ　二月卯の日の祝。具足の餅をまいらせ長柄にて酒をかりて内にこもりおるたぐひをいへり。

いたえん　板緣。　おちえん

いたましひ　痛敷。　おしひ

いたみつた　痛入。いたみいつたの約。　めいわく

いたばさみ　板挾。板にて衣類を挾み、風呂敷包みもたする也。　はさみいた

いたはたき　料理人を罵る詞。俎をたゝく心なり。

いれる　活法悍は性男急也。心いられむと歌によむもこゝろのいらく　せく

すること。

いれこ　入髪の事　いれがみ

いれさく　入作。人の田畑を他の百姓の入て作る事。夫よりしてま男の子　てつたひ

ならんとうたがはしきを入作ならんといへり。

いそかき　越後にてもいそかき。馬齒莧の一種。　つるな

いそがしくて横つらがふられなひ　甚忙しく脇見もならぬさま也。又いそがしくて、

ぢんとふまひをするともいへり。　いっそ

いっくに　田舍詞。　いつもかも

いっつもかっつも　諺草に早晩(イツモ)。いっつもは誤。　いつの間にか

いつのこまにか　少しのまにといふ事。

いちことをする　ねだり事する也。　ねだる

いかていにも　如何躰にも也。いかやうとも、いか様にも、いかんともなども　どのやうにも

いへり。

いがむ　唖合。事苑唖也關聲。　うなる

いっきひ　いっそきたないの約。いっちひ共。小兒の詞也。　ばぐッちひ

いっちくだっちくたいのめ　小兒の戯の口すさび也。いっちくたつちく鯛の目、たいのむ　いっちくたっちく、たゐんどの

すめかぢ原云々共いへり。

いらざるおせゝ　いらざる世話をやくといふ事。　いらぬおせわ

いったへさうだらうとおもった　いったへは一躰の詐欺。名物六帖砧臺道人會典丸皈併　いかさまさう有ふ、と思た

大寺設砧臺道人以主差税□□□□心たがへるやう也。

いのちかぎり　せいいっぱいといふ心也。　こんかぎり

いぐべい　可往也。いくはゆくの相通。いかに□□いぬめになんとぞおも　いかふ

ふなど歌にもよめり。

いくね　百姓の地面垣ねもなく竹藪雜木のたぐひにて境をしたる也。

いやしこ　俚しき子の如しといふ心。孟子飲食之人者人賤也。

いけどしやうして　どしやうは骸の事。どしやう首などいふに同じ。

いけのみ　活呑。齒をあてずして呑こむ也。

いげかたつ　湯氣が立也。

いぎやった　いはしやったの約。

いきび　尻の事。鄙人の詞。

いきばる　息張。

いきすぢひっぱって　息筋引張也。

いきれる　暑き事。下學集熱疾頰。

いしやう　衣裳。或曰汎く通じていふ時は衣裳をいふ。分ちて云時は袷わた入の類のみをいふ。

さかひ木　

いぢがきたなひ　おはきなりをして

うのみ　

けむがたつ　

おッしやった　

いきむ　

いきせいまって　

あつひ　

きもの　

いしびり　

いしころ　

いしばいをぶつ　

いしこひ　

いしゃころばし　

いびる　

いびきす　

いびねる　

いものこ　

いものくき　

しはんぼう　

つぶてをぶつ　

みころし　

いじめる（又あぶること）　

りくりやうした　

むづかしくいふ　

さといも　

いもがら　

吝き事。握つめし心。

石の事。ころ〳〵する故なるべし。いぬころといふたぐひ。

石礫をうつ也。

江刺郡人首村邊の田舍にて、丈夫なることを石こひといふとぞ。

石の如く也といふ心ならん。こひは付字。

膳の湯に少し汁をさしたる也。養生になる事醫者もかなはぬといふ心也。今大略の家にては御家湯といふとぞ。

人をなんぎさする事。又ものを灰に入てあぶることにもいふ。

熬心なるべし。

むづかしき形のものをいふ。或云偏執不通の意にも用ふ。

いびるの延たる也。むづかしくひねる事。

里いもの子なり。はたいも共。青芋本草。

和名鈔萩以毛加良一云以毛也。俗用芋柄二字、芋莖。

いものこじる　おやにもこにもたはれ事する事。

いせぶ　和名鈔海蘿布苔、或云伊勢より多く來る故かくいふ。江戸繪熊野ふしなど。

呂

ろくのうを　國主の御名をさくる故也。明むつくれむつもあけくれと計りいふ。川むつ京。やまぶといせ。こうじばえ阿波。石鮒魚本草。

ろくでない　直でなき事。物語の詞のまほらならぬといふ心にかなへり。ろくすぐにやくにたゝぬ、ろくな事はしもしない、何ともいへり。下學集錄都合(ロクツガフ)也とあり。或曰すべてあしきといふ事に用ふ。

ろぶちべんけい　爐緣辨慶也。

波

ばいた　賣駄、めしもり女のたぐひ、すべて遊女の事。

ばいをかける　小鳥を捕竿也。或曰潘岳射雉賦序に習媒翳之事、注曰媒者少食雉子長而狎レ人能招ニ引野雉ニ云々、今のばいも籠に鳥を入て竿にかけをく時は媒字的當せり。

はのうを　たこをとらんとて、ぐんばいをかける也。

ばいをかける　京にてはい又はえ、白魚をしらはえといふ。和名鈔鮠波江、はやはいの轉、著聞集孝行の部に少きはへといふ魚を一二とりて、述懷百首ふしつけしおどろが下に住はえの心お□な□身をいかにせん、俊頼。

はいこ　はえの兒也。長じたるをくきといひ、子を產んとてはらの赤くなりたるを腹赤とぞいふとぞ。

ばいをぶつ　礫打。下學集飛礫ッブテ。

ばばならしご　祖母馴しそだてし也。

いもでんがく(いもばんがく共)　ふのり

むつのうを　かげべんけい

ふんばり　はや

めだか　つぶてをぶつ

ばばあそだち

はゝきもたし　箒に似たる茸、すべてきのこを何もたしといへり。掃箒菰は聞　はゝきたけ（京）
通志。この茸赤と黄と二種、赤きをはゝきもたし、黄を根ツこ
もたしといふ。

はとがおほくてまめがまかれぬ　少しのもの故、大勢の中へだされぬ事、又おもひ
〳〵の所存をいひて、きまりかぬる事にもいふべし。江戸にて
船頭がおほくて山へふねをのりあげるといふたぐひなり。

はちすがり　すがりはすがるの轉。萬葉にこしほそのすがるをとめ、和名鈔　はち
蜂蠆波知。

はち左衛門　月水の事、てうすばん京、和名鈔月水俗云佐波里。　つき（月やゝ）

はりぬき　紙にてはりこにせし人形、はりこぬき共、和名鈔偶人人形とあ　はりこ
り、下學集張子ハリコ。

はりだした　りつぱにせし事。　きをはった

ぱり〳〵だいこん　細き大根を干たる也。　ほしだいこ

はりつけ　紙細工をするもの。　けうし（師經）

はりつけ　礫、はたもの共。　はっつけ

はりはづし　せいの高き事、はりは梁の約。　はんしやうどろぼう

ばりをつく　ばりはゆばりの約。和名鈔尿由波利小便也、馬の小便におほく
いへり。

はぬけがも　羽脱鳧、くろ鳧、かるかもの事。四季共に有、七八月の頃羽ぬ
けて飛事かなはざるを舟で追廻してつく。これを羽脱つきとい
ふ。

はるなたをこく　虚言をいふ事。　うそをつく

はるていす　ほうろにて山といふ文字をつくり、其あひだにふくわらびをつ
くりし菓子也。

はかみ

はぎり　寢て齒をきしる也。和名鈔齗齒波賀美、睡眠而齒相切有聲也。　はぎしり

はがゆくてならぬ　齒痒き心。かい〳〵しきもかゆ〳〵しき心歟。　かい〳〵しい

はがまやうう?　羽のある釜に似たれば也。生揃ぬ毛の鬢の際に有をいふ也。其さまひさしなどかけしやうに見ゆれば、とばりをかけた共いへり。とばは苫の事。

ばか　目のふちの赤くはるゝ也。のめ共いふ。のひる目共いふとぞ。　ものもらひ

眼前外科正宗科全書眼丹、眼　生酒潰而流水也。紀藩の醫花岡端軒いふ、眼丹はものもらひ也。眼丹初起軟癤の如く目ぶちめがしらへ生ずるなり。奥の醫生曰、此症初起、鹽をぬれば腫消して速に愈ると。又壁にぬりこめしすたをとり、これにてかゆき所をしづかにつくもよしといへり。

はだつ　端立なるべし。　はじめる

はたる　債、小兒などの物ねだりする事。　せびる

はたく　たゝくの轉、擲也。又叩は剝啄韓文叩門聲。江戸にてはしぞこ　ぶつ(打也)

はたをり　なひの事をはたくと利米。　むまをひ

はだぎ　和名鈔絡緯一名促織波太於里。　じゅばん

はだけろ　肌着。　ひろげろ

かっぱだけろとも。ひろげる事。はだかるの轉ぜし也。下學集扈ハタカル、哆ハタケル、集韻張口皃。

はだかのこしひねり　まづしき身にて氣をはりたる事。　はだか虫のくせる、ひ物ずきをす

はたいも　畑芋俗字、青芋本草、田子村よりいづるは上品故、田子いも共いふ。　さといも

はたけ　畑畠和俗字、和名鈔畺耕麥地也八太。　はた

はたよしいも　つくいも共。大里いも京、觀音薯湯春縣志、仙臺にて山のいもといふは江戸にて長いもといへり。　やまのいも

はだおび　肌帶。はだのおび共。和名鈔犢鼻褌毛乃之太之太布佐岐。　したおび(ふんどし共)

はたもとあしがる　旗本足輕。足輕組の内はた本に備ふる也。おほやけの御持同心

のたぐひにあたれり。

ぱっぱ　はなやかなる事。諺草にうつくしき心、河海に云白氏文集に聲花をはなやか。りはつ花の略歟。　はでな

はっぴ　法被。和名鈔半臂衣名也とあるは、今のはっぴにはあらず。下學集法被ハツヒこれなるべし。樂の裝束に半臂あり。もとは舞樂の裝束より轉じ來るにやあらん。江戸にては鳶のもののきるをはっぴといふ。仙臺にては歴々の火事羽織をはっぴといへり。　火事羽織

はったぎ　此たぐひ多し。とうほうはったぎ、くそはったぎ、ねぎむし京。和名鈔蝍蛎波多多、似蚱蜢而細長色黄、飛時作聲、在荒田野者、蟲本草、はったぎばった、共にはた〳〵の轉ぜる也。　ばった

はっけはるなた八ツあたり　八卦をそしる也。あたるも八卦、あたらぬも八卦といふごとくあてすいりようゆへ、あたりても八ツ中りなりといふ心。はるなたはうそといふ事。　てんほ八ツあたり

はっかす　齒缺。　はっくそ

はっかけはん內　和名鈔齔波加久、毀齒也。はんないは齒の無といふ心。小兒のたはむれの口すさみにいふ詞也。齒かけはん內とん十郎、おしき三枚くっかひて、それでもたりないで、うすのふちをくっかひた。

はつう　はつをの訛。俗に初尾と云。下學集最華取二一切草木最初之華一獻神故云爾、諺草初穗、神祇奉る物三代實錄に見へたり。　をどりはねる

はねる　はねまはるはさはぐ事。またむし馬などの跳ることにもいへり。江戸にて大にはねたなどいふは、ぬきんでてよく見へしこと。下學集跳ハヌル馬。

はなすひ　花吸、俗名。梅つばきなどの花を吸故也。和名鈔鶪比衣止里。　ひよどり

はなえび　料理たる所花の如くなればなりと。和名鈔蝦衣比、俗用二海老二字一。　くるまえび

はなみねはしった　隆鼻也。和名鈔鷲波奈久岐、鼻莖也。

はなだまり　鼻塞也、奥向にて婦人のいふ詞なり。鄙人はやはり鼻くそといふ。

はなぐら　下學集鼾イヒキ、はなぐらをかくといふ。

はなたれがき　鼻垂餓鬼。がきは小兒の事。

はなすりがみ　花摺紙。忍ぶ摺の事。もぢすりの中に忍ぶ草・萩の花などすりまぜたる也。

はらがなくつずき　腹の耗し事。

はらがくっちい　はらのはりし事。

はらがでんぐりかへッた　大に笑ふさま。

はらっぴり　和名鈔痢久曾比理の夜萬比。

はらあか　和名鈔鰉波良可、本朝或腹赤、はえの長じたるをくきといふ。子を産んとする時、腹赤し。故にはらかの名あり。箱根にてうぐひをもあかはらといふ。□訪にてはあかうをといふとぞ。正月供する腹赤御贄は鱒魚あかうをます也といへり。

はらきりぐも　蟷螂本草、空も京、腹のしひれたる蜘也。

はらほうだい　ほっぱらほうだいとも、腹一ぱいといふ事。

はらり〳〵　陸離、廣雅參差也、文選注分散也、わらり〳〵共、ばらぐ〳〵共。

はらひにたてくざさる　棄掛になる事をいへり。殿よりかし給ひし銀用捨にて返納に及ばずとある事。

ばらをひく　荆をひく也。說文荆楚木也、下學集荊蕀茨同。

はんげうやく　判形役。おほやけの御小納戸頭取諸家の側かしら納戸頭取方などいふたぐひにあたれり。

はんどう　和名鈔匜、俗用椀字、或云此器有柄半挿其中故名半挿、可以注水之器。江戸にてはんどと云、ともにはんざうの訛也。江戸にてはうへ木鉢の事をもはんど、小きはひのはんどなどいへり。

はなすぢがとほったはなくそ（はなこつこ共）

はないびき

はなたらし

はらが北山だ

はらがくるしい

おなかゞひっくりかへる

はらがくだる

ふくろぐも

はんさんざ

ばらばら

ながれになる

かなぼうひく

はんどうは和名集の波迩佐布の轉ぜしならん。

はんと　とゝきはんどをしめるなどいふ。竪戸口、戸口をしめる事とは中けんじなどにたつる戸の事也。

ばんげ　歌に朝け夕けなどいふに同じく、けにさして心はなし。朝食夕食の事にはあらず。

ばんだい　をのれつとめ成がたく職を辭し、子をつとめに出すを番代といふ。六十未滿にては隱居の願なりがたき故也。

ばうて　場にうてる心、鮟の字に心かよふべし。

はのき　柳木俗字赤楊、古今注田の境に栽、薪とせり。はりのき京。大和本草には榿、宋宋祁が益部方物略記曰、民家蒔之不三年材可倍、常薪之、疾種丞取、里人以爲利、杜子美覓榿栽詩曰、飽聞榿木三年大、蘭山が十品考には赤楊ハリノキ、古今注云赤楊霜降則葉赤材理又赤也の文を載たり。

おくめん

はくらく　下學集醫馬病人云伯樂。

はくる　馬の足をぬき、ひやうしにいらぬこと。

はやす　庖丁などにて物を切る事、刻玉篇割也。堀川百首しづのをがかりてはやせる岡つゝじ、若枝に花の咲にける哉、顯仲。又はやしたてるなどいふは囃也。

はやのり　早乘り。遠乘りの事にもいへり。

はご　羽子。はごをつく。

はごの木　この實羽子のかたちに似たれば也。筑波等に多し。都念子に充るは非なりといふ。この實を羽ごのことといふ。こきのこの事也。

はで　江戸にてはつくはねといへり。

はあから　羽手とかけり。鳥の手を負せし事。立所にとまらざるをいふ。猪鹿などにも通じていへり。

詞の間にはといふ事を入るが國風也。何はあ、これはあの類也。いまから

ばい（馬醫）　むらをつくなをす

はやあげ　はね（をつく）

これも同じ心なるべし。今よりといふ所にいへり。

はさかる　ひろがる事。跋析羅千手經、若爲降伏一切大魔神者當於跋析羅、又宗曾慥類說、婆羅樹北嶺上有古樗樹婆娑四五畝、文選注婆娑放逸貌、字彙舞者之容羅風とあり。これらより出し詞ならん。

はめがわるひ　馬のくつはみをかけることのむづかしき事。はみはくつばみの略、みとめと相通也。和名集鑣久都波美。　はめとりがわるひ

はしり　走水。はしらかし流す故ながしともいふ。　ながし

ばしける　さいばしける共。江戸にてさしめといふが如し。さいばしけるともいへり。

はじっこ　彈競、江戸のきしやごはじき也。つばきの子(ミ)をいふ。　はじきくら

はんがゑひ　把針のよき也。和名鈔針鍼波利、縫衣之具也。下學集洗衣把針者を云ふ。　はり事がゑひ

はじをさす　あつかそ共。端をきらぬ紙也。　はしきらず

はひさがり　生ひ下り也。しやり共。　もみあげ

はも　海鰻鱷本草、ハモは唐音也、大和本草に有。和名鈔鱧魚波無、江戸にてはよりあなごの方をおほく用ゆ。はもははむの轉。

はせる　馳。　かける

はせかへり　走り歸り共。　たち(とってか)がへ(へし共)

はせくらご　馳競。　かけくら

仁

にはむめ　こむめ播磨、郁李本草。

にはざくら　庭櫻俗名、多葉郁李本草、千葉郁李洛陽花木記。

にべもしゅくりもない　にべは鰾、和名集鮸仁倍一云久智、にべはつやを出すものゆへ、つやもなくあいそふもなき事にいふ。　あぢもしやくりもない

にどなりさゝげ　二度生小豆京、江戸さゝげとうさゝげともいふとぞ。菜豆盛京

通志、夏子をとり、うゆれば又秋なりて一年のうちに二度なるなり。

にょう　稻をつみかさねたる所、いなにようとも。或曰穰字か。字書穰禾莖也、又粟已治者。　いなむら

にれき　榆本草、和名鈔榆之皮色白、名枌夜仁禮。　にれ

になわれる　荷なはれるならん。もてあまさるゝ心なるべし。　じゃまにされる

にんど　二度の延たる也。　にど

にう　鳩、にほの轉。鴨鷗本草、鳩は我國の俗字、いつ□むかりとも。和名鈔邇保野鳬、小而好沒水中也。　かいつぶり

にぐむ　いろどり、彩色の事。　ゑとる

にくまれ子のはなさべ　五代史諺云、偏愛子不保葉。　にくまれもののよ、にはゞかるに

にげ僧たち　逃僧立、正月十八日本丸にて讖法あり、饗應のうち海人の謠のきりをうたひいだすと、其儘とるものもとりあへずして、有あふ僧ども我先に座を立てまかづるを逃僧立といふ也。

にてもやひてもくはれない　もてあましもの。　ぶってもたゝへて、もいけない

にやい〳〵のかまのふた　相應々々の有といふ事。　われなべにとぢふた

にしら　ぬしらの轉。　てまいたち

にじがはった　虹。　にじがふひた

にしん　かどをほしたるをいふ、啓蒙。南部かどの脊肉を乾たるをにしん、全くひらきたるをにしと云。津輕にては生者をにしんといふ。冬にしん春にしんの名あり。鯡字を用ゆ。松前にても生なるをにしんといへり。かどの條にくわし。

保

ほいとう　乞食の事。和名鈔乞食加多井、乞索兒保加比々止乞食是也とありし。　こじき（こもかぶり共）

ほい〳〵　人をよぶ聲、ほしい〳〵と聞ゆる也。　おほい〳〵

ほいてう　庖丁。ほいてうはほうてうの訛。　ほうてう

ほろ〳〵　枸杞皂英椄骨木のたぐひの芽だしをつみ味噌に切まじへたる也。　きりあい

ぼろをひく　きものゝさけて裾より綿の下りしをいふ。

ほろをまくる　下學集莽鹵(ホロ)胡亂之義とあり。うろたゆる事と又かひに負てにぐるを母衣をまくってにぐるといふ。これらより出し詞ならん。　へちをまくる

ほろく　おっぽろくといふは物ををとせし事。たねほろきといふは、種をみなうしなひたる事。又きものなどふるふ事をもほろくといへり。　おっことした

ほど　火門なるべし。物を火に入るをほどへくべるといふ。　ゐろり

ほどばい　火門灰。　ぬく灰

ほどむし　これも灰の中に入てむしたる也。　あくへいれる

ほどほる　熱ホトヲル。　あたゝまる

ほどつる　和名鈔百部保止豆良。ほどつる又はほどがなるといふは、おやがあしければ子もよからぬといふたとひにいへり。　うりのつるにはなすびならぬ

ほとらい　程合の約。　ほどあひ

ほじく　解。ひぼとくの約歟。ひぼはひもの相通、紐也。　とく(ほごす ともゝ)

ぼとさけた　ほとゝぎすの聲、不如歸といふが如し。　てっへんかけたか

ぽかん　氣ぬけのせしさまをぽかんとしてゐるといへり。或曰穴のあきたるさまにもいへり。　ほんとしてゐる

ぼたもち　牡丹餅。小豆をつけしさまを牡丹花になぞらへていふ歟。　おはぎ

ぼたもちがほ　肌のあしきさまの似たれば也。江戸にてもぼたもちづら・おぼたなどもいへり。　あばた

ぼたん花火　火の散さま、牡丹花に似たり。　てぼたん

ほだく　春になり、鮒などの水におどるをいふ。

ほだ　蕨などの芽出しのやゝほごれたるをいふ。

ほそび　和名鈔黑子波々久曾、今中國呼黶子、吳楚俗ニ謂之痣者訛也。

ほそかうのけ　細眉也。目の甲の毛といふ心歟。

ほっばらほうたい　腹一ばいといふ事。

ほッこめる　追込る也。

ほっかける　追驅。

ほっかけくらご　水橛。

ほっくゐ　鰯の小なるうちの名。ぼっこはおぼこの略。和名鈔鰯奈與之。

ほっこ　鰯の初生一二寸をぼっこ、それよりいなばしり、づほうなどいへり。長ずるにしたがひ色々の名あり。尺以上をぼらといふ。猶大きなるをいせごいといへり。いなすばしりぼらは江戸も同じ。

ほ（穗）　

ほくろ　

ほそまみげ　

はらさんざ　

をしこめる　

をいかける　

かけくら　

くゐ　

おぼこ　

ほっぼまへ　又おほやけの所にては三月ごろ初て生ずるをきゝ、四月半より

ぼっと　おほこひといひ、夫よりわかなこ、五月半よりすばしり、六月十五日よりいな、二三歳をなよし、四五歳をぼらといふとぞ。土佐日記になよしのかしら、ひらぎらとあり。なよしといふは古名なり。

ぼう　ほうっぼまへ共。

ほんとう　勃と也。江戸にてもゐなかよりうゐ奉公に出しものをぼっとでといへり。ほっこの條にくはし。

ぼんでん　本當。

ぼんでんかつぎ　梵天。山ぶしなどの祈禱に用ふる幣。田の神をまつりし跡にも是を立る。

つきあはせまへ　兩脇より左右の手を入れ、えりへかけてをしすくむる也。

ふいと　

ほんま　

ぼんてんあいしや　皂の一種、あいさといふ有、其中に白くして黑き斑あるもの、遠く見れば梵天を立たるにまよふ故かくいふ。みこあいさ共。あいしやは秋沙の轉。萬葉七、山の間にわたるあきさの行てゐん其川の瀨になみたつなゆめ。

ぽんぽちかのこ　つぶかのこ

ほんぐ　鹿の子のぽち〳〵ある也。

ぼんげ　反古。ほんごの訛。ほぐ共。又ほんご共。和名鈔□春秋沈麟士少清貧以反故寫書數千卷。

ぼんとく　凡下。凡下御扶持人といふは、江戸の職格の御家人にあたる。又早人百姓をも凡下といへり。下學集凡下。

ぼんのくぼ　凡の字なるべし。とくは付字、廣雅凡輕也。今人鄙人爲凡夫、輕賤之稱なりとあり。凡夫凡庸などいふに同じ。和名鈔頂宇奈之頸後也。公羊傳之注齊人頂謂之脰同候反、著聞集十六、建長元年閑院殿云々何がしといふものぼんのくぼに太刀はき袖くゝりて。　ぼんのくと

ぼんごも　盆蔦草の事。

ほんめ　盆和布、俗名、昆布の事。これも盆に精靈棚かざる故也。め海草のわかめ、あらめ、ひろめなどいふたぐひなり。盆前にはぼんめとよび、春のよろこびにはよろこんぶ〳〵とよびてうりあるく也。　まごも

ぼうざうかん　烹雜羹。禁裡にてははうざうとのみいふ。今のぞふになりと御厨頭高橋何某のいひしとぞ。烹はハウ也。ホウゾウはかなのちがひなり。

ほうふる　疫病の事。三日ぼうといふも病勢はげしく三日ばかりに死する故也。　やくべう

ほうたろ　螢火、本草。和名集螢保太流。ほたる京、つねにはほたるともいへど、小兒のこれをとらんとて、ほうたろ〳〵とよぶゆへ、

ほうかいりんき　いやしきものには、ほうたろと延ていふもあり。よその事まで引はへてそねむもののこと。鳥をとるあみよりいでし詞也。

ほうかい　捕鳥網也。　ひるてん

ほうわうさう　のこずり草共。葉のさま鳳凰の尾に似たれば也。著本草。　はごろもさう

ほうける　小兒などのさはぐ事。はふけるの假名にて放下なるべし。諺草放下放下師放下僧などいふに心は同じ。

ほうつほまへ　ほつぼまへとも。きものの前のみだりがはしくなりてあはぬをいふ。　つきあはせまへ

ほうらい　年始に三方に松かざるさまの蓬萊の山にかたどれるに似たればなり。　くひつみ

ほうかへしがならぬ　口に物を一盃にふくみしなり。　ほう（一盃にほばる（うばる共））

ほうたぶ　ふぶふくれしものゝ事。髪たぶ尻たぶなど同じ心也。頰のふくらかなるところをいふ。　ほうぺた

ほうばつと　ばっとして廣き心。

ほうじ　かろき小づかひものゝ事。俗に卯の時とかけり。卯時より出でてつかわるゝ心にや。村々の役にて諸役人のめし焚などに出る也。江戸にてもたまゝ大部屋などにこの稱あり。これも雜人の中にて、ぼうじにあたりしものゝ飯など炊とぞ。

ぼうふりむし　孑孑蟲本草。蜚蠊附錄蚊子注、首尾を動す棒をふるごとし。　ぼうふり

ぼうさっぱ　和名鈔、棒音蚌杖名也、字亦作木。　ぼうちぎり

ぼうはなたらす　棒の如き青はなを垂すなり。　あをはなたらす

ほうだいなし　ほうだいがない。下學集放題、日本俗或曰放埒之人也。　たはい（とほうになし（くれた））

ぼうかへなし　榲桲本草、西國の人これにてカセイタをつくる。ほうかいとも。　まるめろ

ぼぐる　ぼっかけるとも。追掛るの訛ならん。　をふ（をはれるとも）

ぼぐり　木履、下學集。同書屐又云足駄也。ぼくりは總名也。江戸のぼ　あしだ

ほや　っくりはこしらい違也。

ほや　木の枝に丸くかたまりたるものゝある也。葉は柳の葉に似て厚し。さかはやし、京。和名鈔寄生寓生夜止里木一云保夜。

ほえる　老海鼠。和名保夜、他國にてはこの殼を粕漬とす。かたくして食ふべからずして、肉を腸とおもひてすつる人多し、可笑。

ほえつら　吠聲をあげて泣をいふ。

ほてる　吠面。

ほていやきもち　熱のある事。下學集煩熱ホトヲルの約なるべし。

ぼさけた　やきもちの大きなる也。

ほし川　ばさけたの轉歟。はさかるにくわし。干川。鮎をすなどるに、枝川へ本川の水をながし、本川をばせきとむるにより、魚みな枝川へながれこむ也。其時又枝川の下に簀をたて、魚のもれざるやうにして水をおとす。水減じて干がたとなりしとき、石のはざまなどにあるあゆをやすにてつき、又手どりにもする也。

ほしけた　米などの實のいらぬ事。夫よりして出生の子の育ぬ事にもいへり。

ほじける　煩ふ事。

ほしい　干飯。和名鈔糒保之以比乾飯也。下學集には糗糒ホシイ二字義同。

ほしこになる　干蘿蔔。

ほしだいこん　ひば共。大根の葉をほしたる也。

ほしば　

邊

へいかに　平家蟹、俗名しまむくかに。攝津江戸にてもへいけがにともいひ

濱荻

なく　だうみやうじ
なきがほ　ひぼしになる
おぬる　きりぼし
はらふともち　かけな
けばたった　たけふんかに

へり。本草啓蒙を見に蟹譜に云、背殼若鬼狀者、眉目口鼻分布ス、野記鬼面蟹の名あり。

へいふくの御目見　罪ありて愼などせし者、日數ありてゆるされし後も殿の他に出給ふ道に平伏頓首してある也。この事すまざるうちは番をつとむることをはゞかる。

へいこ　閉戸。家督のものゝ閉門にあたる。へや住の者はをのが門なき故戸を閉るなり。

べいこ　べこ共。牛の事。和名集牛宇之、烏牛麻伊黑牛也とあり。べい　うし

べい　はまいの轉ぜしにや。可也。べい、さうだんべいと詞のとまりにべいといふ事をつくる也。榮花物語にうへおはしましてあべい事もを源氏花の宴にもいとおしうもあるべいなどあり。其外あべい事もなどいふもの多し。　べ（いやだんべ、よかんべなどいふ）

べろり〳〵　舌を出す事。苦もなく舌をいだすをもいふ。又いくらものみくふ事にもいへり。

べろ　舌。和名集舌之多。

べろ　さゝがれい。牛のべろ共。みな舌に似たればかくいふ。

べろん〳〵とはだけろ　三味線をひけといふ事。

へばりつく　女房などにへばりついてゐるといふ。はなれざる事。

へはち　眉をへの字八の字のやうにする也。

べにごい　紅鯉、俗名、赤鯉魚證類本草、深紅なる者、金鯉函史。

べにもくもち　紅杢餅。白と紅ともくめのよふにせしくわし、紅餅は丸くしてふち紅に中を白くせし也。この類のくわしあまたあり。江戸にていふ所とは名異なるもまゝあり。

べらこ　少女陰長じたるは淸てへゝといふ。江戸にてきものゝ事をべゞといふをきけばわらふなり。

へろ〳〵　した

したびらめ　べろ〳〵ひけ

ねばりつく　八兵衞まみあひ

ひごい（べにごい共）

へゝ　注上べゝ越後。

ぺち〳〵くさ　ある花阿波、あをはな京、あをある松前、本名つきくさ也。和名鈔鴨頭草都岐久佐鴨跖草本草、鴨脚草百一選方、古今秋の上月草に衣はすらん朝つゆに、ぬれての後はうつろいぬとも、よみ人しらず。拾遺秋の上には人まろ。

べちゃくちゃ　多言にさゝやく事。ヘッちゃくちゃとも。

へりほとり　緣邊。

へがす　剝。はがすの轉。

へそがよじれる程わらふ　大にわらふ事。

へそくりがね　ほまち共。かくしてためたる金也。和名鈔卷子閉蘇績麻圓卷名也。

へぞ〳〵となる　ものゝ減ずるかたち。

へッたれ　和名鈔屁糞三字通、放屁倍比流、下學集屁下部出氣也。

ぺらつく

へり

はがす

はらすぢよってわらふ

へたへたとなる

へッぴり（へをこくとも）

へっくすむ　へすむ共。口をへの字の如くしてくすみゐるさま。

へらまし　女房のとしおっとよりましたる也。

へら　篦。たかへら、のりべら。めしへらは匙也。

へらり〳〵　多言なる也。

へらきう　弱弓の事。二まい竹の弓共。夫よりして下手なるをもへらきうといへり。名物六帖軟弓經雄略軟弓筋用二兩。

べんざうかく　へ相なるべし。口をゆがめてなくさま。

べんけい　わらを束てこしらい、肴など串にしたるをいくつもさすもの。辨慶が七ツ道具の心にて、俗にかくなづけしならん。

へんだいがたつ　篇題が立也。

へんきやく　返却。吐却する事。

へんかいす　約束をへんかへす共いへり。下學集變改ヘンカイ。

へげる　剝ケル也。

へのじぐち　おひ女房（老女房）

べら〳〵

へぼきう

べそをかく

きはがたつ　もど（へとをつく。こす（まものみせ共））

せうべんをする

はげる

べ　ご　べいこ共。牛の事。　うし

べこずみ　あしき墨に牛膠の多く入故かくいふならん。へぐ墨共。　むさッこ墨

べざい　べんざいとも江戸にていふ。そりさげやっこの事。中をくりたるはまさかりびんといへり。　やっこ（そりさげやっこ共）

へびいちご　蛇苺本草。　くさいちご

へびのたまくら　和名鈔蝸牛加太豆不利。　まい〳〵つむり

へひりむし　行夜、本草。へつひりむし共。　へこきむし

へびのむけがら　蛇蛻、本草。くちなわのはかま、京。　へびのぬけがら

べすんでゐる　べすむはべしみの轉、猿樂の面に大べしみ小べしみ有。　しうめんつくって・ゐる

止

といた　といたひらめ共。大サ四五尺戸板の如し。故にかくいふ。比目魚の一種。　大ひらめ

どいつもかつも　誰も彼もいふ事。　どれもかれも

とろく　しきりといふ心。或曰俗兎鹿の字を用ふ。又みだりなることにいふ。めったなどいふ類の詞なり。　やたら

どろごっはい　どろくされ共。泥土のつきごったになりしさま。骨董。　どろだらけ

どろくされ　あたまから泥くされになったなど言。全身ぬれたる事。　づぶぬれ

とば　雁鳧の類をねろふに柴のたぐひにて垣の如くつくり、其かげにかくれて忍びたる也。かたち苫に似たる故かくいふならん。和名鈔苫度萬、編菅芽以覆屋也、下學集篷、或曰射雉賦注醫者所隱以射者。

とばをかけた　月代のまはりにたてし髪のゆへつかぬさま。苫をかけしに似たれば也。又これをはがまやらうともいへり、釜の刄に似たればなり。

とはうもない　無圖謀也、諺草左傳照公七年悼心失圖、圖謀を失ふ也。　らちもなひ

とばさみもち　戸挾餅。正月十四日年男の役にて戸口〻〻え餅一重づゝををくをいへり。

とほりもの　通り者、めあしとも。

どべあい　土塀間なるべし。江戸にてひあはいなどいふが如し。或曰土塀間の字は甚的切、本壁との間をいひて廣く用ひず、垣と垣との間などはどべあひかやうなる所といへり。さればひあはいの詞には的當せるか。

とゞろがなひ　轟く心。なひは助字、みだりがはしきさまをいふ也。古今夏五月雨の空もとゞろに時鳥何をうしとか夜たゞなくらん貫之、歌注萬動とかけり。ひゞくともよめり。

とゝら〳〵　老人杯のとぼ〳〵ありくさま。

とぢくる　綴繰也。ものぬふ事。

とりがらみ　捕搦。

とりがたつ　鳥が立也。鷹狩の時雁鳧の飛去をいふ。とだち又むら鳥の立なとりがあげるど歌におほくよめり。立といふかたまされり。新古今冬、みかりのはかつふる雪に埋れて鳥立も見えず草かくれつゝ匡房。猶多し。

とりをひ　正月十五日の曉七ツ頃より子供らあつまりてやあへ〳〵ゐのしゝかのしゝしりはもゝくりやあへ、となりの子どもらはなつとふはぢをねぶるとも起て鳥ををへなへやあへ〳〵と高聲にいひて鳥追さまをする也。江戸にては鳥をひといふは女太夫とて三絃をひき唄ひありく女乞食なり。

とをのり　遠乘。

とをのき　臭梧桐群芳譜。これにつく蟲をとをのき蟲又くさきむし共いふ、夏草冬蟲これより生ず。とをのきは臭き故遠くのくこゝろ。

えんば（遠馬）

とをき川きりついほふ　遠川切の追放。罪ある者の北上武隈の川を限りに追拂ふ也。　江戸十里四方追放

とかげ　和名鈔蜥蜴一名守宮止加介とあれど仙臺にていふとかげに必的せりともいひがたし。下學集龍子トカケ本草石龍子のうちなり。色のひかりあるものをいふなるべし。とかぎ京。

とかきはんと　戸墻半戸なるべし。和名鈔に椙度加美門樞梁とあり。これらより轉ぜしにや。

どかんすい　たはれににらめくらする前ドガンといひて頭をさげ、スヽイといひて顏を上る也。

どだひ　土臺。礎の事。

どだいがなひ　いしづゑのなき心。或曰、求無飽といふやうなる事に廣く用ふ。

どたばた　どつたばた共、もの音のさま。

とつとう鳥　啼聲によつて名づく。鳩鳩本草、郭公唐匀、布穀列子、和名鈔布穀布々止利、つゝ鳥をいふか。

いしづゑ

しやうとがない

じたばた

かっかうどり

とっつか　執柄の約。鞭などのにぎりをとつかといふ。

とってふられる程しよっぱい　甚醎なり。しほっぱひの約。

とっときいしやう　貴きの轉か。とっとひて置共。取て置の義に似たり。

とっちり　鳥の尻の所、尾筒の邊、臀のこと、和名鈔膃比太禮俗ニ所謂あぶらしり、鳥尾肉也。

とっき　突氣にもあらんか。下學集突鼻日本世話とあり。これより出し詞ならんか。

とっくとなる　こったとなるとも、困苦する心か、又極の心か。

どっちやいぐ　何處え往也。

とねこ　馬の當歳、當年子の約。

とらほうはっだき　鍋の一種、斑ある也。或曰虎斑といふ事ならん。

どんこ　江戸のどんこは仙臺のかまひし也。其外同銘異物あり。

どんづく　動突の轉。

にぎり

とびあがるほどしほっぱい

はれぎ

しっへた

そゝつかしひ

こっきりとする

どこへいく

きち〳〵ばった

おきだら

どうづく

とうば　和名鈔窒堵婆、倶舍論、下學集塔婆梵也、此翻方墳又曰靈廟、たうの假名か。　そとば

とうふかは　豆腐皮。とうふをかたくやきて、ふとせんにせし也。　かはとうふ

どうら　物を置をとゝ　どっさり

どうしかうし　兎し角し歟。下學集に爲左杜右、左右トモカウモ。　どうなりかうなり

とうぎった　大きな模樣はなやかなるをいふ。江戸にて思ひ切たもやうなどいへり。　おもひきった

どうてん　動轉。下學集動顚、源氏箒木どうもなく。　びっくり

どうにあげる　動上。どうあげ共。　どうにつく

どうごゑ　胴聲。　ぢごえ

どうろく　田舍の詞。夫の事。　つれあひ

どうしん　同心。　つれだつ（同道共）

どうがめ　どんがめとも、泥龜の轉。和名鈔鼈加波加米。だんかめ備前、　すっぽん

どう　どんがめ五畿内。　くろどき

とや　鵠（サギ）の一種の頭より肩の邊にて黑くして毛もなし。朱鷺（トキ）と群を同し、頭全身灰白なり。雉子をまつに、いなむらのごとくつくり、其中に入てまつを鳥屋まちといふ。これをゆるさるゝをおとや御免といふ。きじとや共。

とふひ　和名集鴟一名鳶止比。　とんび

どぶろく　濁酒の事。ダクロウの轉歟。和名鈔醪　毛呂美。　にごりさけ

とてつもなひ　下學集途轍。　とつけもなひ

とぎすく　尖りたる樣の心、磨すか。　とがくしひ

とゆへ　戸結。市人の罪ある者戸に竹を横にあてゝゆひ、町役のもの封印をつく。　とじめ

とびあがり　心の飛揚する也、うはきなるさま。　ひょうきん

どびん　つむりをむき出し、丸く見ゆるさま、土瓶に似たる故かくいふ　いとびんやっこか。

ともへかも　めぐりかもとも、江戸にてともへ鳧といふは仙臺にていふかう　はしひろ（口かも共）らいたかふ也。水にうかびてめぐりおる故巴ともいふ也。

とぜん　徒然。字彙徒は但也、李白詩所向非徒然。　さみしひ

どす　癩病の事。癩風外科正宗、癘風素問、或云屠子。　かったひ

智

ぢろほいまはる　胡亂つき廻るさま。　うろ〳〵する

ちゞこまる　縮まる也。　まるっちくなる

ちりぞうり　塵草履。　わらざうり

ちり〳〵まふ　とり込さま、塵々歟。　めくとをまはす

ちりをき　下品のはな紙也。江戸の上田のたびく、一帖ごとにわらをおゝ

ゆへ也。　ふるがねかひ

ぢがねかひ　地金買。　しやうじ

ちからがみ　力髪。　ちよろぎ

ちようろぎ　しやうろぎ共、草石蠶、本草。　ちよんぼり

ちよつぽり　蕓爾なるべし。　ちよなくな

ちよんなりくんなり　埒のあかぬ事。或曰婦女の媚るさまをいへり。それよりして埒のあかぬ事にも用ふ。　あくせく

ちだくだ　いそがはしきさま。　つゝ〳〵とした

ぢっくりとした　たけひきくふとりしさま。　一寸ぼうし

ちっさこ　矮人。ちいさご共。ちさこひ共。　ちっぽけ

ちっさこひ　小さこき也。下學集蟄居倀チツコトシタルワランベ、蕓爾、日本紀チイサイト訓ス。

ちっくと　少也。ちくと共。　すこ（すこしの約）

ちゃっちゃくちゃ　ちづちくち共。より集りてかたるさま。　**ぺちゃくちゃ**

ちっこ　乳也。こは助字、乳をやれといふ事をちっこをのませろといふ。　**ちゝ**

ちらばら　和名鈔赤子知子、含乳之義也。目に物をさへぎる事。又人などのまれ〳〵に見ゆる事もいへり。　**ちらくら**（ちらほら共）

ちら〳〵とも云。

ちんぼ　ちんぼう共。小兒の男根。豊前小倉にてもちんぼうといふとぞ。　**ちんぼこ**（ちんこ共）

ちむすぼれ　血亂。　**ちゝがひ**

ぢんだあい　青大豆のあえもの。下學集糖太。　**ごへいかつぎ**

ちんてうする　ものいまへする事。

ぢんごばこ　塵籠歟。長つぼねのまへなどに大なる箱やうのものを置、塵あくたをすつる也。貴人のかたはらにあるぢんごも紙屑のたぐひすてらるゝなれば、それよりいひならはせるにや。

ぢんとのまひをする　ながゐをしてぢんとのまひにあふともいふ。いそがしくて舞をまふやうにせはしき也。或曰ぢんとのまひ也。

ちくと　少也。些といふの延たるか。ちっくととも、ちくと計とも、下學集屑計（チトバカリ）。　**ちっと**

ちくら　からとも、日本ともつかぬ事、ちくらが沖にのりだしたともいへり。　**どちらつかぬ**

ちぐはぐ　物の揃はぬ事。　**あぺこぺ**

ぢぐちがおもひ　地口の多きか。ぢぐちをはたくともいふ。　**おちやっぴい**

ちゃきこき　きくしゃくする事。　**ひんちゃん**

ちゃきん　いもしゃきん共。薯蕷又は栗をよくすりたるもてあんをつゝむくわし也。又ちゃきんふのやきといふもあり。茶巾にて形をつくる故かくいふか。又沙金袋の形に似たるゆへ、しゃきんともいふか。

ちゃくら　ちゃらくらの略。　**ちょくら**